

岩手大学農学部
設置の趣旨等を記載した書類

令和6年
岩手大学農学部

設置の趣旨等を記載した書類

目 次

1. 設置の趣旨及び必要性	3
2. 学部・学科等の特色	23
3. 学部・学科等の名称及び学位の名称	26
4. 教育課程の編成の考え方及び特色	28
5. 教育方法、履修指導方法及び卒業要件	30
6. 編入学定員を設定する場合の具体的計画	31
7. 企業実習（インターンシップを含む）や海外語学研修等の学外実習 を実施する場合の具体的計画	32
8. 取得可能な資格	32
9. 入学者選抜の概要	33
10. 教育研究実施組織等の編制の考え方及び特色	35
11. 研究の実施についての考え方、体制、取組	36
12. 施設・設備等の整備計画	36
13. 管理運営	38
14. 自己点検・評価	38
15. 情報の公表	38
16. 教育内容等の改善のための組織的な研修等	39
17. 社会的・職業的自立に関する指導等及び体制	40

別紙資料1：岩手大学農学部の設置概要

別紙資料2：農学部学科・コース別カリキュラムマップ

別紙資料3：農学部学科・コース別履修モデル

別紙資料4：農学部編入学生学科・コース別モデルカリキュラム

1. 設置の趣旨及び必要性

(1) 趣旨と必要性

寒冷地における農業振興を目的に1902年に創立された盛岡高等農林学校を前身とする岩手大学農学部は、以来120年以上の教育研究の実績を有し、宮澤賢治をはじめとする数多くの有為な人材を社会に送り出してきた。本学農学部の歴代教授には、脚気予防に重要なビタミンを米糠から抽出する研究を盛岡で開始した鈴木梅太郎博士や、鉄輸送物質であるムギネ酸を大麦から発見した高城成一博士など、我が国の農学をリードする錚々たる教員が在籍し、本学農学部の教育研究に大きな影響を与えてきた。本学農学部の「実学をもって地域社会に貢献する」という姿勢は、盛岡高等農林学校の創立から1世紀以上を経た現在においても脈々と受け継がれており、社会が大きな変貌を遂げようとする現代にあっても設立当初の理念に基づく実践あるいは実学を重視した教育研究を進めていく姿勢に変わりはない。

現代社会は、「先行きが不透明で予測が困難な社会」とされ、変動性、不確実性、複雑性、曖昧性を示す英語の頭文字である「VUCA」の時代とも呼ばれる。特に、我が国の「地方」においては、少子化、人口減少や高齢化が急速に進んでおり、我が国の食料基地に位置する岩手大学農学部の高次教育に果たす役割や社会からの期待は今後さらに大きくなると考えられる。

一方、現在の岩手大学農学部の教育研究は平成28年度の改組により、6学科体制で行われている。初年次の学生（共同獣医学科を除く学部1年および2年次学生対象）に対するアンケート結果では、本学農学部に興味を惹かれた理由として、「広大な農場があり、実践的に学ぶことができること」「1年次から実習があること」「大学の比較的近くに演習林があること」「水産について広く学べること」等の記述があり、「化学、生命学、生物学、薬学方面全般に興味があり、農学はそれらの分野を包含した幅広い学問だと考えたから」といった回答もあった。また、「魅力ある農学部はどのようなものか？」との質問に対しては、「専門分野を学びつつ、他の分野についても視野を広げることができるようなカリキュラムがあれば良い」「幅広く体系的に学べ、多くの人と交流する機会があると良い」といった意見が寄せられており、現在の個別の学科を中心とした教育だけでは必ずしも学生のニーズに十分応えていないことを示唆する結果であった。これらの結果を踏まえるとともに、現在社会が求める幅広い社会課題に対応できる知見や発想力、課題解決能力を持つ人材を養成するためには、現在の教育体制を改編することが必要である。

(別紙資料1：岩手大学農学部の設置概要)

① 食料農学科

地球環境の変化に伴う安定した農業生産への懸念、高齢社会による健康への不安は益々深刻化している。食料生産は人間の生存基盤であり、そこから生まれる食品が私たちの健康を支えており、両者は密接に関わっている。したがって、持続的な食料システムの構築を実現するためには、食料生産から食品にいたるプロセスを含有する教育・研究が必要不可欠であり、その両者の観点を有する人材は、次世代の食料生産と食品・健康に関する課題解決に有益な人材となり得る。その背景から、食料農学科では、農学に関連した産業の持続的な発展と振興に関する分野、国内外の食品産業の発展や超高齢社会における食を通じた人々の健康に関する分野を教育研究していく。これにより、地域・国際社会での食料生産、食品供給、健康分野における課題解決や新しい価値の創出を通じて、健康で持続的な食料と食品の生産・供給を担う人材の育成を目指す。

①-1 農学コース

食料生産を担う農業者の減少・高齢化が進む中、地球規模で進む温暖化によって農作物の収量や品質の低下など生産現場に大きな影響が生じている。令和3年5月に策定された「みどりの食料システム戦略」では、我が国の食料・農林水産業が直面するこれらの課題の解決に向けて持続的な食料システム構築の必要性が掲げられている。将来にわたり食料の安定

供給と農業および食品産業の発展を維持するためには、省力化による労働生産性の向上、資源の循環利用や地域資源の最大活用、化学農薬・肥料の利用削減による環境負荷軽減等の推進が必要である。農学コースは、生産、環境、政策などの食料システムを構成する要素を専門とする教員を配置し、持続的な食料生産・供給の基礎から応用までの一貫した教育・研究を行うことにより、農学に関する専門知識と技術をもち、農業および食品産業が抱える諸問題の解決に貢献できる人材の育成を行う。この分野の卒業生の主な進路は、大学院進学、公務員（技術系）をはじめ、種苗・食品・農薬関連企業、農業団体などである。その70%は一次産業を主体とする北海道・東北地区の地方自治体や企業が占めており、今後も高い人材ニーズは継続するものと想定される。

①-2 食品健康科学コース

食品健康科学コース配置教員の大半が所属している、現応用生物化学科の卒業生は、化学と生物を基盤とする教育と技術を修得し、農学、食品、生命科学などの広い領域において、我が国の産業と科学技術の発展に貢献している。なかでも毎年、食料生産が盛んな東北地域の重要産業である食品生産関連企業、それを支える食品・化学分析関連企業などからの求人が多数あり、卒業生が就職している。また、全国規模で活動するそれら企業への就職者も多い。また、地方自治体の研究機関からの食品関連産業を支援できる知識を持った人材ニーズも高い。そのような背景から、本コースでは食品関連産業や食と密接な関係のある健康関連産業を担う研究者、技術者が必要とする基礎的知識と技術を研究活動を通じて教育する。理工学部の生命科学関連教員の参画を得て、「食」と必然的なつながりのある「生命」の観点を同時に教育することで、食品・健康産業に貢献できる人材の育成をし、超高齢社会の中で地域や社会が求める食と健康に対する要請に応える。

② 生命科学科

生命科学科は、生命の営みの基本であるタンパク質や核酸、糖鎖や脂質などが関与する分子レベルの反応に焦点を当て、生命現象を分子レベルで理解することにより、地球環境問題の解決、種の多様性の保存、健康寿命の延長など、次世代の諸問題の解決を先導できる人材育成を目標とする。

②-1 分子生物機能学コース

分子生物機能学コースでは、微生物、植物、昆虫、動物など様々な生き物の細胞や個体レベルで見られる多種多様な生物機能について分子レベルで解明し、その知見を産業への応用をはじめとして、環境や食料、健康などのグローバルな問題を解決するための研究に取り組み、バイオテクノロジーのフロンティアを築くことのできる人材を育成する。このような人材を育成するため、生物機能に関わる基礎的および専門的知識を習得させ、実験、卒業研究を行う中で、自ら発想し行動する力、独創性ならびに柔軟な対応力を身につけさせ、グローバル化する社会でその力を発揮できる自律性や判断力の養成を行う。本コースを修めた卒業生は、分析系や化学系、食品系の各種企業だけでなく、様々な生物種の分子生物機能の知識や研究技術を駆使することにより、研究や教育関連分野、官公庁において能力を発揮できる人材となると期待される。

②-2 分子生命医科学コース

我々人類の寿命の延長と人口の増加は、健康衛生や疾病の予防などによって達成されている。一方で高齢化社会においては、個々の生活の質（Quality of life; QOL）の向上が重要な課題になっている。QOLの向上のためには、老化の遅延や治療、疾病の予防や再生医療、環境との調和や生物多様性の保護などの諸問題を解決する基礎研究から応用研究が必要とされている。これらの課題を解決するため、分子生命医科学コースでは、微生物から動物、ヒトに至るまでの生命現象を分子レベルで解明し、その知見を健康衛生、疾病の予防、再生

医療などに生かし、人々の QOL の向上に寄与することを目指す。我々の次世代は、環境と調和、より生物多様性に富んだ環境に生き、感染症を含む微生物を制御し、老化の遅延や治療が可能になることを目指している。そのための生物多様性の重要性、感染症や疾患、老化現象の成り立ちを分子レベルで理解できる人材育成、教育プログラムを目指す。本コースの卒業生は、幅広い知識を元に生命科学に関わる諸問題に取り組み、研究機関や教育機関、医薬品や医療関係などの産業界や官公庁などで活躍することが期待される。

③ 地域環境科学科

地域環境科学科では、持続可能な食と農の科学、地域生態系の保全、森林資源の管理と持続的な利用、持続的農業生産と環境管理、農業インフラの整備、スマート農業システムの導入、グリーントランスフォーメーションについて、地球環境問題とSDGsへの対応をベースとした教育を行うため、次の2コースを設置する。

③-1 革新農業コース

革新農業コースの礎となる農業工学とその関連分野は、食料の安定生産と機械化による効率化などを中心に東北地域の農業生産に貢献してきた。近年はこれまでに以上にハードウェアとソフトウェアの融合によるイノベーションが必要となり、その対応が時代の要請となっている。特に、農林水産省が令和3年5月に策定した「みどりの食料システム戦略」には、本コースが教育研究課題としてきた、持続的な食料システム、ゼロエミッションや農業DXがキーワードとなっており、農業と食を切り拓く革新的な農業技術を取り扱うことのできる人材は今後ますます必要となる。そこで本コースでは、スマート農業技術を核とした、農村環境や農業の基盤インフラ整備の技術の開発、地域のネットワークづくり、次世代型食料システムの創出を担うことのできる人材を育成する。これによりグローバルな視点と高度な専門知識を備えて地域農業を先導するとともに、持続可能な食料・農業・農村システムの実現に向けた取り組みを通じてSDGs 達成に貢献できる人材を育成する。

近年の本分野の卒業生の主な進路は、大学院修士課程、国家公務員（総合職・一般職）、地方公務員（農学職・農業農村工学職）、国立研究開発法人（研究職）、建設企業、建設コンサルタント企業、環境保全団体、食品製造・流通企業、IT 企業などであり、持続的な食料システム、ゼロエミッションや農業DXの重要性が増すなか、人材のニーズは極めて高い。

③-2 森林科学コース

森林科学コースの母体である森林科学科は、JABEE（日本技術者教育認定機構）の認定を受けた教育組織であり、これまでも国際的な認定基準に基づいて第三者機関により保証されたプログラムによって社会の要求水準を高いレベルで満たす人材を輩出してきた。森林科学コースでは、引き続き JABEE 教育プログラムを実践することにより、森林を主とする地域生態系の保全と管理並びに森林資源の持続的な生産と利用等に関わる森林及び森林関連分野における高度な専門職業人＝森林科学技術者の育成を行う。具体的には、森林に関わる幅広い専門知識を身につけるとともに、それらを適切に応用することによって、森林の造成・管理から木質資源の加工・流通に至る様々な局面で地域に即した次世代の林業・林産業を担うことができる技術者、さらには、里地里山地域までを含む地域生態系の保全と管理及び防災の方策について自立的かつグローバルな視点で考察し、地域や社会の安定と持続的発展に貢献できる技術者を森林科学技術者と定め、森林科学コースにおける人材育成の目標とする。

④ 動物科学・水産科学科

現在、我が国の食料自給においては、畜産物および水産物、すなわち動物性タンパク質の生産と安定供給が極めて重要である。特に、本学が位置する岩手県は、国内有数の畜産基地であり、また国内有数の海産物の水揚げ量を誇る三陸沿岸を有することから本学農学部における畜産学および水産学教育と人材育成にかかる期待も大きい。前回の平成 28 年度改組においては、従来から畜産分野の教育研究を担ってきた動物科学科に加え、三陸地域における水産学研究および人材育成をミッションとする食料生産環境学科水産システム学コースを設置し、東日本大震災後の三陸地域復興に大きな役割を果たしてきた。今後、北東北地域のみならず我が国における家畜生産および水産業のさらなる発展のためには、動物性タンパク供給という共通のミッションをもつ動物科学分野と水産学分野が共同で学科を組織し、畜産分野と水産分野に共通する課題やその解決にむけた教育研究を実施する意義は極めて大きい。さらに、里山における野生動物の管理や海洋環境における生態系の保護など両分野が担う使命は今後ますます重要であり、それら教育研究も本学科における重要なミッションである。

④-1 動物科学コース

上記のように、本学が位置する岩手県は、北海道・南九州と同じく我が国有数の畜産基地であり、本学農学部は動物科学科および共同獣医学科を中心に産業動物の生産に関する教育と研究を実施してきた。これまでも取り組まれてきた家畜生産に関する教育研究において、多様化かつ深刻化する当該分野における諸課題を解決し得る新しい技術の確立とそれらの開発・普及を担う畜産人材の即戦力人材の養成のためには、従来の畜産・獣医学に関する教育・研究に加えて、水産科学分野と強固に連携した一貫通貫の新しい畜産学教育研究の確立と実施が重要かつ不可欠である。本コースでは、従来の家畜生産に関する基盤的研究に加えて、現在の畜産現場が直面する様々な課題解決、さらには野生動物の保護管理や人と動物の適切な関係など新たな課題を解決し得る人材の育成と研究に関して、飼料生産・供給、技術普及の最前線である民間飼料会社、国や県などの行政・研究機関とも連携して遂行する。

④-2 水産システム学コース

岩手県を含む三陸沿岸域は日本有数の水産食料基地として長い歴史をもつが、東日本大震災の影響が大きく、地域の経済や雇用を支えてきた基幹産業である水産業の衰退に拍車がかかっている。三陸沿岸域の水産業復興を迅速に進め、「なりわい」の再生や地域の活性化と持続的発展を求める社会的ニーズは、平成 24 年 3 月 23 日に閣議決定された「新たな水産基本計画」や平成 23 年 8 月 11 日に策定された「岩手県東日本大震災津波復興基本計画」などにあるように極めて大きい。また、平成 25 年 12 月 10 日に農林水産省が発表した「農林水産業・地域の活力創造プラン」においては、東日本大震災からの復旧・復興、水産国日本の復活が掲げられている。さらに平成 30 年には資源管理強化、漁村活性化と海面利用高度化、水産物流通適正化などを骨子として漁業法改正が行われ、わが国の水産業は成長産業化に向けて新たな歩を進め始めている。これらを受けて水産システム学コースでは、水産業に関わる基礎的な知識や技術に関する教育・研究を基盤とし、水産資源の生産（漁獲、増養殖）から、加工、流通にいたる一連のシステムのいずれかの分野に専門性を置きながら、分野横断的な幅広い知識や技術の習得を通して、水産業全体を俯瞰する総合的な観点から三陸沿岸域の水産業の復興、ひいてはわが国の水産業成長産業化に寄与できる専門職業人材を育成することを目的とする。また、同じく動物性蛋白源生産分野を担当する動物科学コースをはじめとして食料生産に関わる他学科・コースとのカリキュラム連携により、学生自身の志向を受けて幅広い学修の機会を提供することで、新たな発想で水産業の将来を担うことの出来る人材の育成を目指す。

(2) 人材育成像

上記のように、本学農学部は、これまでも農学分野における地域および国内外の諸課題の

解決ならびにそれらに資する人材の育成を目指して実践的かつ先端的な教育・研究を行ってきた。昨今の農学分野においては、世界的規模で進む環境の変化や農業生産を取り巻く様々な情勢の変化を反映した教育・研究の必要性が増すとともに、年々複雑化、多様化しているそれら諸課題の解決にあたっては個々の専門分野における教育・研究の深化のみならず、農学分野を広く横断する俯瞰的な視点に立った教育・研究が強く求められている。新しい農学部では、農学分野において基盤を成す「食料」「生命」「環境」の3つの領域を基軸として、各領域に関する教育・研究に加え3つの領域を俯瞰しそれらを複合するための「農学の総合知」教育を実践する。これにより、自身の専門分野に関して農学全体からの視点を持ち、身につけた知識・技術を他の分野に広く展開できる能力を持った次世代の人材を育成する。

① 食料農学科

食料農学科は、人々の生存の基盤である食料の生産とそれを基にした食品に関わる知識と技術の教育と研究を行い、地域・国際社会での食料生産、食品供給、健康分野における課題解決や新しい価値の創出を通じて、健康で持続的な食料と食品の生産・供給を担う人材を育成する。

①-1 農学コース

農学コースでは、持続的な食料生産のため農業および食品産業の問題解決に貢献できる人材の育成を目的とする。そのために、農作物の栽培技術の高度化と作物生育の基盤となる土壌の保全、多様な植物の生産性・機能性の向上、有用作物の品種開発、植物ウイルスを利用した先端技術の開発、食料安全保障を支える政策・戦略などに関する教育・研究を通じ、農学に関する専門知識と技術を身につけ、社会のリーダーとして活躍できる専門職業人、またグローバルな視点をもった研究者・技術者として国内外で活躍できる人材を育成する。

①-2 食品健康科学コース

食品健康科学コースでは、国内外の食品産業の発展や超高齢社会において食を通じた人々の健康に寄与できる人材の育成を行うことを目的とする。そのために、農産物の利用や加工に関わる食材や食品とそれらの成分の物理的・化学的特性、高齢社会にも対応する高度な食品加工に関する知識や技術、人々の健康に係わる食品の栄養性や疾患との関わり、健康機能性に関する知識と高付加価値食品の開発、多様な農産物や天然資源からの医療や健康に貢献できる物質探索とその応用、日本酒などの地域の伝統食産業や発酵産業の発展に繋がる専門知識や技術、食品の品質や安全性の管理で求められる数理データサイエンスを学習し、地域社会及び多様なグローバル社会の中で高いコミュニケーション能力を備えて、食品・健康産業に寄与できる科学的な知識と広い視野を備えた人材の育成を行う。

② 生命科学科

生命科学は、生命現象や生物を研究対象とする生物学の一分野を指し、植物学、動物学、微生物学、健康科学など様々な学問の基礎的、かつ共通部分を生命科学の特徴とする。本学科は動植物、微生物に特徴的な生命現象を扱う分子生物機能学コースと、動物や人の健康に関わる研究を行う分子生命医科学コースで構成され、生命の営みの基本であるタンパク質や核酸、糖鎖や脂質などが関与する分子レベルの反応に焦点を当て、農学および生物学の基

礎部分の理解を進展させる。分子レベルでの反応を深く理解することで、その原理を利用し、生物の機能強化を可能にし、様々な疾病の予防など、人類が直面している多くの課題の克服を可能にする。生物の分子レベルでの知識と理解に立脚し、様々な問題を俯瞰的に捉え、地球環境問題の解決、種の多様性の次世代への保存、健康寿命の延長など、次世代の諸問題の解決を先導できる人材を育成する。

②-1 分子生物機能学コース

分子生物機能学コースでは、微生物、植物、昆虫、動物など様々な生き物の細胞や個体レベルで見られる多種多様な生物機能について分子レベルで解明し、その知見を産業への応用をはじめとして、環境や食料、健康などの問題に直面している社会に安定をもたらす研究へと展開する。また、これら成果を教育に生かし、バイオテクノロジーのフロンティアを築く人材を育成する。本コースでは、生物機能に関わる基礎的および専門的知識を習得し、実験、研究科目を学ぶ中で、自ら発想し行動する力、独創性ならびに柔軟な対応力を身につけ、グローバル化する社会でその力を発揮できる、自律性や判断力を持つ人材の養成を行う。本コースを修めた卒業生は、分析系や化学系、食品系の各種企業だけでなく、様々な生物種の分子生物機能の知識を発揮することにより、研究や教育関連分野、官公庁で貢献できる人材となる。

②-2 分子生命医科学コース

我々人類の寿命の延長と人口の増加は、健康衛生や疾病の予防などによって達成されている。一方で高齢化社会においては、個々の生活の質（Quality of life; QOL）の向上が重要な課題になっている。分子生命医科学コースでは、微生物から動物、ヒトに至るまでの生命現象を分子レベルで解明し、その知見を食料問題の解決、健康衛生、疾病の予防などに生かし、人々のQOLの向上に寄与することを目指す。我々の次世代は、環境と調和、より生物多様性に富んだ環境に生き、感染症を含む微生物を制御し、老化の遅延や治療が可能になることを目指している。そのための生物多様性の重要性、感染症や疾患、老化現象の成り立ちを分子レベルで理解できる人材育成、教育プログラムを目指す。本コースの卒業生は、幅広い知識を元に生命科学に関わる諸問題に取り組み、研究機関や教育機関、医薬品や医療関係の産業界や官公庁等で活躍することが期待される。

③ 地域環境科学科

地域環境科学科では、持続可能な食と農の科学、地域生態系の保全、森林資源の管理と持続的な利用、持続的農業生産と環境管理、農業インフラの整備、スマート農業システムの導入、グリーントランスフォーメーションについて、地球環境問題とSDGsへの対応を念頭に置いた教育を行い、未来の農林業を担う地域先導型人材を育成する。

③-1 革新農業コース

革新農業コースの礎となる農業工学とその関連分野は、食料の安定生産と機械化による効率化などを中心に東北地域の農業生産に貢献してきた。現在はこれまで以上にハードウェアとソフトウェアの融合によるイノベーションが必要となり急速な対応が求められている。そこで革新農業コースでは、農業と食を切り拓く革新的な農業技術を取り扱うことの

できる人材の輩出を目的とした教育・研究を行う。具体的には、スマート農業技術を核とした、農村環境や農業の基盤インフラ整備の技術の開発、地域のネットワークづくり、次世代型食料システムの創出を担うことのできる人材を育成する。さらには、グローバルな視点と高度な専門知識を備えて地域農業を先導するとともに、持続可能な食料・農業・農村システムの実現に向けた取り組みを通じてSDGs達成に貢献できる人材育成のための教育・研究を展開する。卒業後の主な進路は、大学院修士課程、国家公務員（総合職・一般職）、地方公務員（農学職・農業農村工学職）、国立研究開発法人（研究職）、建設企業、建設コンサルタント企業、環境保全団体、食品製造・流通企業、IT企業、スマート農業関連企業などである。

③-2 森林科学コース

森林科学コースの母体である森林科学科は、JABEE（日本技術者教育認定機構）の認定を受けた教育組織であり、これまでも国際的な認定基準に基づいて第三者機関により保証されたプログラムによって社会の要求水準を高いレベルで満たす人材を輩出してきた。森林科学コースでは、引き続きJABEE教育プログラムを実践することにより、森林を主とする地域生態系の保全と管理並びに森林資源の持続的な生産と利用等に関わる森林及び森林関連分野における高度な専門職業人＝森林科学技術者の育成を行う。具体的には、森林に関わる幅広い専門知識を身につけるとともに、それらを適切に応用することによって、森林の造成・管理から木質資源の加工・流通に至る様々な局面で地域に即した次世代の林業・林産業を担うことができ、さらには、里地里山地域までを含む地域生態系の保全と管理及び防災の方策について自立的かつグローバルな視点で考察し、地域や社会の安定と持続的発展に貢献するための素養を兼ね備えた技術者を森林科学技術者と定め、その養成を森林科学コースにおける人材育成の目標とする。

④ 動物科学・水産科学科

動物科学・水産科学科は、「食料」「生命」「環境」の3領域いずれにも深く関連する教育・研究分野である。本学科では、農学領域において畜産物および水産物の生産と供給を担う二つの産業基盤を背景とした教育・研究を行うとともに、野生動物や海洋生物の生理・生態とそれらの有益な利用方法に関する知識および技術の教育・研究を行うことにより、動物・水産資源の安定的な生産と供給、その高度利用に貢献する人材を育成する。

④-1 動物科学コース

動物科学コースでは、産業動物生産（畜産）と野生動物を含む幅広い動物種の保護・管理に関する知識および技術に関する教育・研究を基盤とし、産業動物の遺伝的改良と増殖、増産動物の飼料生産と栄養・飼養、動物資源の有効利用、様々な動物種の保護・管理、さらにはそれらの生理機能の解明を通じて、動物関連産業の発展と生命科学に関する高度な科学技術の開発に貢献する専門職業人材を含め、人と動物が共生する豊かな地域社会の創造に資する人材を育成する。

④-2 水産システム学コース

水産システム学コースでは、水産業に関わる基礎的な知識や技術に関する教育・研究を基盤とし、水産資源の生産（漁獲、増養殖）から、加工、流通にいたる一連のシステムのいす

れかの分野に専門性を置きながら、分野横断的な幅広い知識や技術の習得を通して水産業全体を俯瞰する総合的な観点から三陸沿岸域の水産業の復興、ひいてはわが国の水産業成長産業化に寄与できる専門職業人材を育成することを目的とする。

(3) 学位授与の方針 (ディプロマ・ポリシー)

岩手大学農学部では、農学分野において基盤を成す「食料」「生命」「環境」の3つの領域を俯瞰しそれらを複合するための「農学の総合知」に関する知識を身につけ、さらに、以下に掲げる各学科・コースの学位授与の方針に該当する者に学位を授与する。

① 食料農学科

①-1 農学コース

農学コースの教育目的に則り、所定の教育課程を修了し、以下の各項目を身につけた学生に「学士（農学）」の学位を授与する。

(知識・理解)

1. 農業および食品産業に関わる諸問題を理解するために必要な自然科学、情報技術、コミュニケーション技術に関する基礎知識を有している。
2. 食料の持続的な安定生産および安定供給、生命機能の解明と食料生産への応用に関する基礎的知識および科学的方法を理解している。

(思考・判断)

3. 農学に関する知識と理解を基礎に、関連する諸問題に対して多面的に考察し、自分の考えをまとめ、行動することができる。

(関心・意欲)

4. 豊かな課題探求能力と課題解決能力をもって農業および食品産業が抱える諸問題を解決しようとする意欲を持っている。
5. 農学に関連した産業の創出・発展のニーズに、協調性と倫理性をもって、自立的・継続的に行動することができる。

(技能・表現)

6. 自らの倫理的な思考・判断のプロセスや結果を説明するためのプレゼンテーション能力とコミュニケーション能力を習得している。

①-2 食品健康科学コース

食品健康科学コースの教育目的に則り、所定の教育課程を修了し、以下の各項目を身につけた学生に「学士（農学）」の学位を授与する。

(知識・理解)

1. 食と健康に関わる諸問題を理解するために必要な自然科学、社会科学、情報技術およびコミュニケーションに関する基礎知識を身につけている。
2. 農産物や食品素材の物理的・化学的特性やその加工に関する知識、栄養代謝や天然資源の健康機能素材に関する理解が身につけている。

(思考・判断)

3. 農産物や食品素材に関する知識と理解を基礎に、食糧、健康に関する諸課題・未知事項について、多面的に思考し自らの考えをまとめる能力を身につけている。

(関心・意欲)

4. 食糧、健康に関する課題や未知事項に関心を持ち、その解決・解明に取り組む意欲を持っている。

(態度)

5. 農産物、食品素材、天然資源の有効利用やその応用を通じて、食品産業や医薬品産業を始めとする食品・健康関連産業の創出・発展に寄与し、広い視野を持って地域や社会

に貢献する考え方や行動がとれる。

(技能・表現)

6. 自らの知識と論理的な思考に基づいた判断結果を的確に説明する表現力や、それを実践する技能を修得している。

② 生命科学科

②-1 分子生物機能学コース

分子生物機能学コースの教育目的に則り、所定の教育課程を修了し、以下の各項目を身につけた学生に「学士（農学）」の学位を授与する。

(知識・理解)

1. 生物機能を理解するための基礎となる自然科学や専門知識を広い視野で俯瞰できる教養的素養を有している。
2. 生化学、分子生物学、細胞生物学、微生物学、植物生理学、応用昆虫学の専門的な基礎知識を身につけ、様々な生き物の生物機能について十分に理解している。

(思考・判断)

3. 様々な生物における分子機能に関する知識と理解を基礎に、関連する諸課題に対して多面的に考察し、自分の考えをまとめることができる。

(関心・意欲)

4. 様々な生物における分子機能の未解決課題に関心を持ち、産業への応用をはじめとして、環境や食料、健康などの分野での問題解決に意欲的に取り組むことができる。

(態度)

5. 様々な生物における分子機能の有効利用やその応用を通じて、分析系や化学系、食品系の関連産業や研究関連分野の創出・発展に寄与し、高い倫理観を持って地域や社会に貢献する考え方や行動がとれる。

(技能・表現)

6. 自らの知識と論理的な思考に基づいた判断を的確に説明する表現力や、それを実践する技能を修得している。

②-2 分子生命医科学コース

分子生命医科学コースの教育目的に則り、所定の教育課程を修了し、以下の各項目を身につけた学生に「学士（農学）」の学位を授与する。

(知識・理解)

1. 生命活動のプログラムを分子レベルで解き明かす分子生命科学やその知見を医療に役立てる生命医科学を理解するための基礎となる自然科学や専門知識を広い視野で俯瞰できる教養的素養を有している。
2. 生化学、分子生物学、バイオテクノロジー、細胞生物学、生理学、神経科学、免疫学、組織形態学、再生医療工学、動物行動学などの専門的な基礎知識を身につけ、様々な生命活動のプログラムについて十分に理解している。

(思考・判断)

3. 生命活動のプログラムやその医療への応用に関する分子レベルでの知識と理解を基礎に、関連する諸課題に対して多面的に考察し、自分の考えをまとめることができる。

(関心・意欲)

4. 様々な生命活動のプログラムに関する分子メカニズムに関心を持ち、生活の質(Quality of life; QOL)の向上に役立てる試みをはじめとして、健康衛生や疾病の予防などの生命科学に関連する問題解決に意欲的に取り組むことができる。

(態度)

5. 様々な生命活動のプログラムの分子レベルでの解明やその医療への応用を通して、医療系や製薬系、化学系、食品系の関連産業や研究関連分野の創出・発展に寄与し、高い倫

- 理観を持って地域や社会に貢献する考え方や行動がとれる。
(技能・表現)
6. 自らの知識と論理的な思考に基づいた判断を的確に説明する表現力や、それを実践する技能を修得している。

③ 地域環境科学科

③-1 革新農業コース

革新農業コースの教育目的に則り、所定の教育課程を修了し、以下の各項目を身につけた学生に「学士（農学）」の学位を授与する。

- (知識・理解)
1. 自然科学や情報技術および地域文化に関する基礎知識を深く理解している。
 2. 革新的な農業技術の基礎および応用分野の知識を身につけている。
- (思考・判断)
3. 地域の課題について考察し、課題解決のための適切な判断ができる能力を身につけている。
 4. 革新的な農業技術について総合的に考察し、適切な判断ができる能力を身につけている。
- (関心・意欲)
5. 持続可能な食料・農業・農村システムの実現に関心を持ち、問題解決に貢献しつつ地域農業を先導する意欲と能力を持っている。
- (態度)
6. 自らの社会的責任と倫理遵守の重さを自覚し、多様な主体と協働しながら継続的に学ぶ態度を身につけている。
- (技能・表現)
7. 調査・研究や各種統計によるデータを分析・利用する技能を身につけている。
 8. 聞き手に明快に説明できるプレゼンテーション技能とコミュニケーション能力を身につけ、文章や口頭発表によって表現できる。

③-2 森林科学コース

森林科学コースの教育目的に則り、所定の教育課程を修了し、以下の各項目を身につけた学生に「学士（農学）」の学位を授与する。

- (知識・理解)
1. 数学、自然科学、情報処理に関する基礎的知識を持っている。
 2. 森林科学の学問内容および方法を説明できる。
- (思考・判断)
3. 森林の多面的機能について、総合的に考えることができる。
 4. 与えられた制約の下で計画的に仕事を進めることができる。
- (関心・意欲)
5. 地球的視点から、各地の文化や異なる価値観に関心を示している。
 6. 自主的、継続的に学修できる。
- (態度)
7. 技術者が社会に対して負っている責任を感じる。
 8. チームワークを意識して行動できる。
- (技能・表現)
9. 日本語で論理的に記述・発表・討議できる。

10. 森林科学の知識を利用し、社会の要求を解決するために提案できる。

④ 動物科学・水産科学科

④-1 動物科学コース

動物科学コースの教育目的に則り、所定の教育課程を修了し、以下の各項目を身につけた学生に「学士（農学）」の学位を授与する。

（知識・理解）

1. 農学全体を俯瞰する幅広い知識及びその基礎となる教養を持っている。

2. 動物生産及び動物科学分野に関する知識を持っている。

（思考・判断）

3. 動物関連産業に関する課題の解決を適切に行うため、動物生産及び動物科学分野に関する知識により考察することができる。

（関心・意欲）

4. 動物関連産業に関する課題に関心を持ち、課題の解決に意欲的に取り組むことができる。

（態度）

5. 動物関連産業に関する課題の解決を客観的に行うため、情報収集及び議論を積極的に行うことができる。

（技能・表現）

6. 動物関連産業に関する課題を解決して論文又は口頭で発表を行うか、修得した動物生産及び動物科学分野の技術を実践することができる。

④-2 水産システム学コース

水産システム学コースの教育目的に則り、所定の教育課程を修了し、以下の各項目を身につけた学生に「学士（農学）」の学位を授与する。

（知識・理解）

1. 水産システム学を実践するための数学、自然科学、社会科学、コミュニケーション（日本語・英語）に関する基礎的知識を身につけている。

2. 水産業の復興と持続的発展に貢献するために、水産科学分野に加えて、水産業に関わる人文・社会科学分野までの幅広い関連分野を網羅した水産システム学を体系的に身につけ、水産業の現状とその課題を俯瞰的視点から理解できる。

（思考・判断）

3. 水産業が抱える諸課題について多角的に分析、俯瞰的に思考し、最善の解決策を判断できる。その中で個人のそれぞれの志向に応じた専門性追求に向けて関連分野を含めた幅広い知識を修得している。

（関心・意欲）

4. 日本と世界の水産業の持続的発展の諸課題に関心を持ち、地域における実体験を通じた学びを通して問題解決に意欲的に取り組むことができる。

（態度）

5. 水産業に関わる専門家としての高い倫理観を持ち、真摯に責任をもって持続的水産業構築の諸課題について積極的に携わる態度を持つ。

（技能・表現）

6. 水産システムを構成する漁業、増養殖業、加工・流通産業を理解し、分析するための基礎的技術を身につけ、地域貢献活動などによる実体験を通して社会実践に向けた意欲が養われている。

7. 調査・実験や各種統計によるデータを的確かつ適正に分析・利用する技術、結果に基づく論理的な思考能力、および得られた結果を的確に伝えることが出来るコミュニケーション力（プレゼンテーション、日本語、英語）を身につけている。

(4) 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

農学部は、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に基づき、「食料」「生命」「環境」の各分野で幅広い教養と基礎学力を養うために、食料農学科、生命科学科、地域環境科学科、動物科学・水産科学科ごとに、教養教育科目、専門基礎科目、学部共通科目、学科共通科目及びコース科目で構成される系統的な教育課程を編成している。なかでも、農学を俯瞰的に捉え、かつ、地域課題を含めた現代的諸課題を解決するため、幅広く農学領域全体を対象とした「農学の総合知概論」および「農学の総合知実習」を全学科共通で配置するとともに、「農学の総合知概論」および「農学の総合知実習」で培った知識をもとに自らの専門分野や卒業研究と農学との関係を考えるための「農学の総合知演習」の履修を必修としている。

① 食料農学科

食料農学科は、人類の生存基盤である食料の生産とそれを基にした食品に関わる知識と技術の教育と研究を行い、地域・国際社会での食料生産、食品供給、健康分野における課題解決や新しい価値の創出を通じて、健康で持続的な食料と食品の生産・供給を担う人材を育成する。

①-1 農学コース

農学コースでは、農学に関する専門知識と技術を身につけ、社会のリーダーとして活躍できる専門職業人、またグローバルな視点をもった研究者・技術者として国内外で活躍できる人材を育成するため、以下のカリキュラムを構成している。

なお、教育課程を編成している各科目の評価に関しては、別途定めている「成績評価のガイドライン」に基づくものとする。

（知識・理解）

1. 広範な知識と高い倫理性を身につけるために、教養教育科目群、専門基礎科目群、学部共通科目群に属する科目の履修を必修としている。
2. 農業および食品産業に関する高い専門知識と技術を身につけるために、専門コア科目において作物学、園芸学、植物育種学、植物病理学、土壌学、植物栄養生理学、農業経済学に関する科目群を配置している。

（思考・判断）

3. 農学に関する知識と理解を基礎に、関連する諸課題に対して多面的に考察し、自分の考えをまとめることができるように、「食料農学科概論」、専門コア科目に演習科目および実験科目を配置している。

（関心・意欲）

4. 農業および食品産業に関する具体的な課題への関心と、課題を解決する能力・技術・意欲を身につけるための科目として、専門コア科目に「農場実習Ⅰ」、学部共通科目に「農学の総合知」修得のための概論と演習、「インターンシップ」および「卒業研究」を配置している。

（態度）

5. 農業および食品産業の創出・発展のニーズに、協調性と倫理性をもって、自律的・継続的に行動できる能力を修得するために、「インターンシップ」、「食料農学科概論」および「卒業研究」を配置している。
6. 論理的な思考の過程と判断の結果をわかりやすく説明するための高いプレゼンテーション能力とコミュニケーション能力を修得するために、演習科目、「卒業研究」および「科学英語」を配置している。

①-2 食品健康科学コース

食品健康科学コースでは、国内外の食品産業の発展や超高齢社会において食を通じた

人々の健康に寄与できる人材を育成することを目的として、以下のカリキュラムを編成している。

なお、教育課程を編成している各科目の評価に関しては、別途定めている「成績評価のガイドライン」に基づくものとする。

(知識・理解)

1. 食と健康に関わる諸問題を理解するために必要な自然科学、社会科学、情報技術およびコミュニケーションに関する基礎知識を身につけるため、教養教育科目と専門基礎科目の履修を必修としている。
2. 農産物や食品素材の物理的・化学的特性やその加工に関する知識、栄養代謝や天然資源の健康機能素材に関する理解を修得するため、専門コア科目に食品化学、栄養化学、食品工学、天然物化学、食品微生物学に関する科目群を配置している。

(思考・判断)

3. 農産物や食品素材に関する知識と理解を基礎に、食糧、健康に関する諸課題・未知事項について、多面的に思考し自らの考えをまとめる能力を育成するため、専門コア科目に演習科目および実験実習科目を配置している。

(関心・意欲)

4. 食糧、健康に関する課題や未知事項に関心を持ち、その解決・解明に意欲的に取り組むために、学部共通科目に「インターンシップ」や「卒業研究」を配置している。

(態度)

5. 農産物、食品素材、天然資源の有効利用やその応用を通じて、食品産業や医薬品産業を始めとする食品・健康関連産業の創出・発展に寄与し、広い視野を持って地域や社会に貢献する考え方や行動をとることが可能になるよう、「インターンシップ」、農学の総合知の修得に関する科目および「食料農学科概論」を配置している。

(技能・表現)

6. 自らの知識と論理的な思考に基づいた判断結果を的確に説明する表現力や、それを実践する技能を修得するため、学部共通科目に「科学英語」や「卒業研究」、専門コア科目に演習科目や実験実習科目を配置している。

② 生命科学科

生命科学科は、生物の分子レベルでの知識と理解に立脚し、様々な問題を俯瞰的に捉え、地球環境問題の解決、種の多様性の次世代への保存、健康寿命の延長など、次世代の諸問題の解決するための教育研究を行う。

②-1 分子生物機能学コース

分子生物機能学コースでは、微生物、植物、昆虫、動物など様々な生き物の生物機能に関わる基礎的および専門的知識を習得し、実験、研究科目を学ぶ中で、自ら発想し行動する力、独創性ならびに柔軟な対応力を身につけ、グローバル化する社会でその力を発揮できる、自律性や判断力を持つ人材を育成することを目的として、以下のカリキュラムを編成している。

なお、教育課程を編成している各科目の評価に関しては、別途定めている「成績評価のガイドライン」に基づくものとする。

(知識・理解)

1. 生物機能を理解するための基礎となる自然科学や専門知識を広い視野で俯瞰できる素養を身につけるために、教養教育科目、専門基礎科目、学部共通科目に属する科目の履修を選択必修としている。
2. 様々な生物の機能を分子レベルで解明し、産業への応用をはじめとして、環境や食料、健康などの分野で問題解決へと導く専門的な基礎知識を身につけるために、専門コア科目において生化学、分子生物学、細胞生物学、微生物学、植物生理学、応用昆虫学に関する

る科目群を配置している。

(思考・判断)

3. 様々な生物における分子機能に関する知識と理解を基礎に、関連する諸課題に対して多面的に考察し、自分の考えをまとめることができるように演習科目および「卒業研究」を配置している。

(関心・意欲)

4. 様々な生物における分子機能の未解決課題へ関心を持ち、また、専門知識を産業へと応用することをはじめ、環境や食料、健康などの分野での課題解決への意欲を身につけるための科目として「インターンシップ」および「卒業研究」を配置している。

(態度)

5. 様々な生物における分子機能の有効利用やその応用を通じて、分析系や化学系、食品系の関連産業や研究関連分野の創出・発展に寄与し、高い倫理観を持って地域や社会に貢献する考え方や行動をとることが可能になるよう学部共通科目の「インターンシップ」を配置している。

(技能・表現)

6. 自らの知識と論理的な思考に基づいた判断を的確に説明する表現力や、それを実践する技能を修得するために、演習科目、「卒業研究」、「科学文献読解法」を配置している。

②-2 分子生命医科学コース

分子生命医科学コースでは、様々な生命活動の分子レベルでの解明・理解に基づく医療への応用に関する基礎的および専門的知識を習得し、実験、研究科目を学ぶ中で、自ら発想し行動する力、独創性ならびに柔軟な対応力を身につけ、生命科学分野の諸問題の解決に力を発揮できる、自律性や判断力を持つ人材を育成することを目的として、以下のカリキュラムを編成している。

なお、教育課程を編成している各科目の評価に関しては、別途定めている「成績評価のガイドライン」に基づくものとする。

(知識・理解)

1. 様々な生命活動のプログラムを分子レベルで理解し、その知見を医療に応用する基礎となる自然科学や専門知識を広い視野で俯瞰できる素養を身につけるために、教養教育科目、専門基礎科目、学部共通科目に属する科目の履修を選択必修としている。
2. 生命活動のプログラムを分子レベルで理解し、生命科学分野の諸問題の解決へと導く専門的な基礎知識を身につけるために、専門コア科目において生化学、分子生物学、バイオテクノロジー、細胞生物学、生理学、神経科学、免疫学、組織形態学、再生医療工学、動物行動学などに関する科目群を配置している。

(思考・判断)

3. 生命活動のプログラムや医療に関する知識と理解を基礎に、関連する諸課題に対して多面的に考察し、自分の考えをまとめることができるように実験科目、情報科目および「卒業研究」を配置している。

(関心・意欲)

4. 生命活動のプログラムの分子レベルでの理解やその医療への応用に関する諸問題に関心を持ち、専門知識を生活の質(Quality of life; QOL)の向上へと応用することをはじめ、健康衛生や疾病の予防などの分野での課題解決への意欲を身につけるための科目として「インターンシップ」および「卒業研究」を配置している。

(態度)

5. 生命活動のプログラムの分子レベルでの理解やその医療への応用を通して、医療系や製薬系、化学系、食品系の関連産業や研究関連分野の創出・発展に寄与し、高い倫理観を持って地域や社会に貢献する考え方や行動をとることが可能になるよう学部共通科目「インターンシップ」を配置している。

(技能・表現)

6. 自らの知識と論理的な思考に基づいた判断を的確に説明する表現力や、それを実践する技能を修得するために、実験科目、情報科目、「卒業研究」を配置している。

③ 地域環境科学科

地域環境科学科では、持続可能な食と農の科学、地域生態系の保全、森林資源の管理と持続的な利用、持続的農業生産と環境管理、農業インフラの整備、スマート農業システムの導入、グリーントランスフォーメーションについて、地球環境問題とSDGs達成への対応を念頭に置いた教育を行い、未来の農林業を担う地域先導型人材を育成することを目的として、以下のカリキュラムを編成している。

なお、教育課程を編成している各科目の評価に関しては、別途定めている「成績評価のガイドライン」に基づくものとする。

③-1 革新農業コース

革新農業コースでは、農業と食を切り拓く革新的な農業技術を取り扱うことのできる人材の輩出を目的とした教育を行う。具体的には、スマート農業技術を核とした、農村環境や農業のインフラ整備の技術の開発、地域のネットワークづくり、次世代型食料システムの創出を担うことのできる人材を育成する。さらには、グローバルな視点と高度な専門知識を備えて地域農業を先導するとともに、持続可能な食料・農業・農村システムの実現に向けた取り組みを通じてSDGs達成に貢献できる人材育成のための教育・研究を展開することを目的として、以下のカリキュラムを編成している。

(知識・理解)

1. 自然科学や情報技術および農業と食を切り拓く革新的な農業技術に関する基礎知識を深く理解できるよう、教養教育科目と専門基礎科目の幅広い履修を課している。
2. スマート農業技術を核とした、農村環境整備や農業生産のインフラ整備の技術開発、地域のネットワークづくり、次世代型食料供給システムの構築の知識を身につけられるよう、コース科目に、力学系科目群、地理情報系科目群、水土系科目群、農業・食料生産科学系科目群、生態・社会科学系科目群、演習科目群を配置している。

(思考・判断)

3. 地域の問題点と課題を把握し、専門知識を総合してさまざまな課題について考察できるとともに、課題解決のための判断力が養われるよう、コース科目に演習科目群、学部共通科目に「インターンシップ」と「卒業研究」を配置している。
4. 革新的な農業技術について総合的に考察し、その現場適用における適切な判断ができる能力を養えるよう、コース科目に「スマート農業概論」、「フィールドロボティクス」、「革新農業実践論」などの実用的かつ実践的な授業科目群を配置し、2、3年次での履修を促している。

(関心・意欲)

5. 持続可能な食料・農業・農村システムの実現に向けた取り組みや革新的な農業技術に関心を持ち、これらを取り巻く課題を解決しつつ地域農業を先導する意欲と能力を身につけられるよう、講義に関連する演習、実験科目を設けている。

(態度)

6. 将来の技術者あるいは研究者としての社会的責任と倫理遵守の重さを自覚し、多様な主体と協働して学びを継続するよう、コース科目の演習、実習科目を配置するとともに、学部共通科目に「インターンシップ」を配置している。

(技能・表現)

7. 調査・研究や各種統計によるデータを分析・利用する技能の獲得を目的として、「情報処理演習」や「地理情報処理学」を設けている。
8. 聞き手に明快に説明できるプレゼンテーション技能とコミュニケーション能力および

文章や口頭発表による表現力を身につけられるよう、「農学の総合知演習」と学部共通科目の「卒業研究」を必修としている。

③-2 森林科学コース

森林科学コースでは、東北地方の恵まれた自然環境を背景として、森林の持つ多様な環境保全機能や樹木資源の生産と利用について総合的に学習し、自然との共生関係を築きながら発展できる地域社会の実現に貢献する人材を育成することを目的として、以下のカリキュラムを編成している。

なお、教育課程を編成している各科目の評価に関しては、別途定めている「成績評価のガイドライン」に基づくものとする。

(知識・理解)

1. 数学、自然科学、情報処理に関する基礎的知識を獲得するため、1、2年次に教養教育科目の技法知科目（情報科目）、学問知科目（理学・工学領域）及び学部専門基礎科目の履修を促している。

2. 森林科学の学問内容と方法を説明できるようにするため、専門コア科目に森林学・森林工学、自然環境学、林産学に関する基礎的な授業・実習科目群を配置し、2、3年次の履修を促している。

(思考・判断)

3. 森林の多面的機能について、総合的に考えることができるようにするため、専門コア科目に「野生動物管理学」、「森林政策学」、「砂防学」などの応用的な授業科目群を配置し、2、3年次の履修を促している。

4. 与えられた制約の下で計画的に仕事を進められるようにするため、専門コア科目に「森林造成学実習」、「森林利用学実習」、「砂防学実習」などの野外実習科目群を配置し、3年次の履修を促している。

(関心・意欲)

5. 地球的視点から各地の文化や異なる価値観に関心を示すようになるため、1、2年次に教養教育科目の学問知科目と技法知科目（外国語）の履修を促している。

6. 自主的・継続的に学修できるようにするため、専門コア科目全般で自己学習時間の確保を促すとともに、授業外学修を特に重視する科目として、専門コア科目の「森林計測学」、専門基礎科目の「生物統計学」を配置し、1年次の履修を促している。

(態度)

7. 技術者倫理を感じられるようにするため、学部共通科目の「インターンシップ」の履修を促すとともに、専門コア科目に「技術者倫理入門」、「森林科学応用演習Ⅰ」、専門サブ科目に「海外・日本の林業」を配置し、2、3年次の履修を促している。

8. チームワークを意識して行動できるようにするため、専門コア科目に「森林科学基礎演習」、「森林測量学実習Ⅰ」、「森林測量学実習Ⅱ」を配置し、1年次から2年次の履修を促している。

(技能・表現)

9. 日本語で論理的に記述・発表・討議できるようにするため、1年次に専門コア科目の「森林科学の歴史と現在」、学科共通科目の「地域環境科学概論」の履修を促している。

10. 森林科学の知識を利用し、社会の要求を解決するために提案できるようにするため、専門サブ科目に「森林科学応用演習Ⅰ」、「森林科学応用演習Ⅱ」、学部共通科目に「卒業研究」を配置し、3年次後期から4年次の履修を促している。

④ 動物科学・水産科学科

動物科学・水産科学科は、「食料」「生命」「環境」のいずれの領域にも深く関連する教育・研究分野として、畜産物および水産物の生産と供給を担う二つの産業基盤を背景とした専門分野に関するカリキュラム、さらには、野生動物や海洋生物の生理・生態とそれ

らの利用に関するカリキュラムを編成している。

④-1 動物科学コース

動物科学コースでは、産業動物（家畜）、実験動物、野生動物、展示動物などの様々な動物種を対象に、人と動物が共生する心豊かな地域社会の創造を目指し、効率的かつ機能的な動物関連産業の発展と動物科学に関する高度な科学技術の開発に貢献できる人材を育成することを目的として、以下のカリキュラムを編成している。

なお、教育課程を編成している各科目の評価に関しては、別途定めている「成績評価のガイドライン」に基づくものとする。

（知識・理解）

1. 学士としての幅広い教養と豊かな人間性を養うために、教養教育科目、専門基礎科目の履修を必修としている。
2. 動物生産及び動物科学分野に関する知識を身につけるために、産業動物（家畜）、実験動物、野生動物、展示動物など、幅広い動物種を対象として、動物の生理、形態、組織、遺伝育種、発生、生殖、飼料、草地、栄養、飼養、管理、行動及び動物資源の利用に関する科目を配置している。

（思考・判断）

3. 動物関連産業に関する課題を理解し、講義で得た専門知識を駆使して課題解決を適切に行う技能を養成するために、各専門コア科目の実験科目および「牧場実習」などを配置している。

（関心・意欲）

4. 我が国有数の畜産物生産地域である東北地方という背景を活かし、動物関連産業発展に資する動物科学を学ぶために、「牧場実習」を含む専門コア科目を配置し、その一部に現場見学を取り入れている。また、実地研修の内容を取り入れた科目として、「インターンシップ」を配置している。

（態度）

5. 情報収集及び客観的な議論を積極的に行うことができる技能を養成するために、各専門コア科目の実験および「牧場実習」、さらに「卒業研究」へつながるよう科目を配置している。

（技能・表現）

6. 修得した動物生産及び動物科学分野の技術を総合的に実践する能力を養成するために「卒業研究」および「インターンシップ」を配置している。

④-2 水産システム学コース

水産システム学コースでは、広範な水圏生物の生態解明と水産資源の利活用と保全の方法に関わる分野を学び、グローバルな食料需給とローカルな資源循環の視点から地域産業と地方創生を担う人材を育成することを目的として、以下のカリキュラムを編成している。

なお、教育課程を編成している各科目の評価に関しては、別途定めている「成績評価のガイドライン」に基づくものとする。

（知識・理解）

1. 水産システム学を実践するための数学、自然科学、社会科学、コミュニケーション（日本語・英語）に関する基礎的知識を獲得するため、1、2年次における教養教育科目及び専門基礎科目にこれら基礎的知識に関する科目を配置し、履修を促している。
2. 水産業の復興と持続的発展に貢献する人材を育成するために、水産科学分野に加えて、水産業に関わる社会科学分野までの幅広い関連分野を網羅した水産システム学を体系的に履修する。
3. その中で学生個人それぞれの志向に応じた専門性追求の意欲を醸成し、関連領域への

知識拡大のため、他学科・コース提供科目履修の機会を提供する。

(思考・判断)

4. 水産業が抱える諸課題について多角的に分析、俯瞰的に思考し、地域における実体験を通じた学びを通して最善の解決策を判断できるよう基礎論と実践的な実習・演習を履修する。

(関心・意欲)

5. 日本と世界の水産業の持続的発展の諸課題に関心を持ち、問題解決に意欲的に取り組めるように、水産業の発展に関連した科目を履修する。

(態度)

6. 水産業に関わる専門家としての高い倫理観を持ち、真摯に責任をもって持続的水産業構築の諸課題について積極的に携われるように、水産業復興に資する科目を履修する。

(技能・表現)

7. 水産システムを構成する漁業、増養殖業、加工・流通産業を理解し、分析するための基礎的技術を身につけるための科目として、「海洋実習Ⅰ」、「海洋実習Ⅱ」、「地域水産業実習」などの実習科目を配置し、履修を促している。また、学生個人による積極的な地域貢献活動を通じた学びを推奨するため、「地域貢献演習」を配置している。

8. フィールド調査や実験、各種統計によるデータを的確かつ適正に分析・利用する技術、結果に基づく論理的な思考能力、および得られた結果を的確に伝えることが出来るプレゼンテーション力と語学力を身につける科目を履修する。

(5) 入学者受入れの方針 (アドミッション・ポリシー)

農学部は、幅広く深い教養と豊かな人間性を基礎として、農学の基盤である「食料」「生命」「環境」分野における、基礎的・応用的・統合的な専門知識と技能を修得することにより、地域および国際社会の食料・生命・環境の諸問題の解決に貢献できる人材の養成を目的とする。

1) 知識・技能・理解

- ・農学の基盤である「食料」「生命」「環境」分野を学ぶに相応しい基礎学力を有する人

2) 思考力・判断力・表現力

- ・農学分野に関する諸問題を全体的な視点から見出し、論理的にとらえ、探求する思考力と自らの意見をまとめ表現する能力を有する人

3) 関心・意欲・態度

- ・学びで得た知識や経験、理論や技術を、明確な目的をもって農学および現実社会の諸課題の解決に生かす意欲のある人

4) 主体性・協働性

- ・農学分野に関する諸課題を主体的に学ぶ積極性を持つとともに、創造性豊かな発想をもとに協働して学ぶことのできる人

① 食料農学科

①-1 農学コース

1) 知識・技能・理解・思考力・判断力・表現力

- ・農学および農学を取り巻く学問体系を学ぶのに相応しい基礎学力を有する人
- ・農作物や農業生物を有益な資源として生かすために技術を学ぶのに相応しい基礎学力を有する人

2) 関心・意欲・態度・主体性・協働性

- ・持続的な食料の安定生産・供給を実現するための戦略・論理・技術を学ぶ意欲のある人
- ・グローバルな視点から、農業および食品産業の抱える諸問題の解決に積極的に

取り組む意欲のある人

①-2 食品健康科学コース

- 1) 知識・技能・理解・思考力・判断力・表現力
 - ・食品素材の特性の解明と応用を学ぶのに相応しい基礎学力を有する人
 - ・食品・栄養成分の体内での動きの解明とその健康への関わりを学ぶのに相応しい基礎学力を有する人
- 2) 関心・意欲・態度・主体性・協働性
 - ・健康と食品機能について専門的知識を修得する意欲のある人
 - ・食品・栄養成分、天然資源の化学的特性と生体利用の解明について専門的知識を修得する意欲のある人
 - ・食や健康に関する課題に対応した高度な食品加工に関する知識と技術を修得する意欲のある人

② 生命科学科

②-1 分子生物機能学コース

- 1) 知識・技能・理解・思考力・判断力・表現力
 - ・微生物、植物、昆虫、動物などの生物機能を学ぶのに相応しい基礎学力を有する人
 - ・生物機能の分子レベルでの解明と応用を学ぶに相応しい基礎学力を有する人
- 2) 関心・意欲・態度・主体性・協働性
 - ・生物機能に関する知識を習得し、実験、研究科目を学ぶ中で、自ら発想し行動できる人
 - ・教育成果をベースにバイオテクノロジーのフロンティアを築くことができる人

②-2 分子生命医科学コース

- 1) 知識・技能・理解・思考力・判断力・表現力
 - ・生物多様性の重要性、感染症や疾患、老化現象を分子レベルで学ぶのに相応しい基礎学力を有する方
 - ・生命現象の分子レベルで解明と応用を学ぶのに相応しい基礎学力を有する方
- 2) 関心・意欲・態度・主体性・協働性
 - ・健康衛生、疾病の予防、再生医療技術などに生かし、人々の生活の質向上に寄与できる人
 - ・生命科学に関わる諸問題に取り組み、活躍することができる人

③ 地域環境科学科

③-1 革新農業コース

- 1) 知識・技能・理解・思考力・判断力・表現力
 - ・農業生産インフラ整備と農村環境の保全、地域のネットワークづくりを学ぶのに相応しい基礎学力を有する人
 - ・スマート農業、次世代型食料システムの創出に関する知識と技術の修得に相応しい基礎学力を有する人
- 2) 関心・意欲・態度・主体性・協働性
 - ・地域資源の適切な利用・管理と農村環境の保全、および地域振興について多面的に学ぶ意欲のある人
 - ・スマート農業、持続的な食料供給システムと資源の有効利用に関する最新技術を学ぶ意欲のある人

③-2 森林科学コース

- 1) 知識・技能・理解・思考力・判断力・表現力
 - ・森林科学を学ぶに相応しい基礎学力を有する人
 - ・多様な機能を活かした森づくりと利用・保全に関する知識と技術の修得に相応しい基礎学力を有する人
- 2) 関心・意欲・態度・主体性・協働性
 - ・多様な機能を発揮できる森づくりと林産資源の利用に必要な知識と技術を学ぶ意欲のある人
 - ・里地里山を含む地域生態系の保全と管理および防災の方策について学ぶ意欲のある人

④ 動物科学・水産科学科

④-1 動物科学コース

- 1) 知識・技能・理解・思考力・判断力・表現力
 - ・動物生産および動物科学に関する知識と技術の修得に相応しい基礎学力を有する人
 - ・生命現象の解明と応用を学ぶに相応しい基礎学力を有する人
- 2) 関心・意欲・態度・主体性・協働性
 - ・動物科学への強い関心を有し、課題の探求と解決に取り組む意欲のある人
 - ・動物に関連した産業の諸問題の探求と解決に取り組む意欲のある人
 - ・グローバルな視点から、動物に関連した産業の持続的発展に積極的な意欲を有する人

④-2 水産システム学コース

- 1) 知識・技能・理解・思考力・判断力・表現力
 - ・水産資源の管理・生産、その利活用、流通・販売に関する学問領域を学ぶに相応しい基礎学力を有する人
 - ・日本と世界の水産業の持続的発展の問題解決に必要な基礎的な思考・判断力を有する人
- 2) 関心・意欲・態度・主体性・協働性
 - ・三陸地域の社会と水産業に関心を持ち、東日本大震災からの復興と水産業の課題に取り組む意欲のある人
 - ・日本と世界の水産業の持続的発展の諸課題に関心を持ち、問題解決に取り組む意欲のある人
 - ・高い倫理観を持ち、持続的水産業構築の諸課題について積極的に携わる態度を備えた人

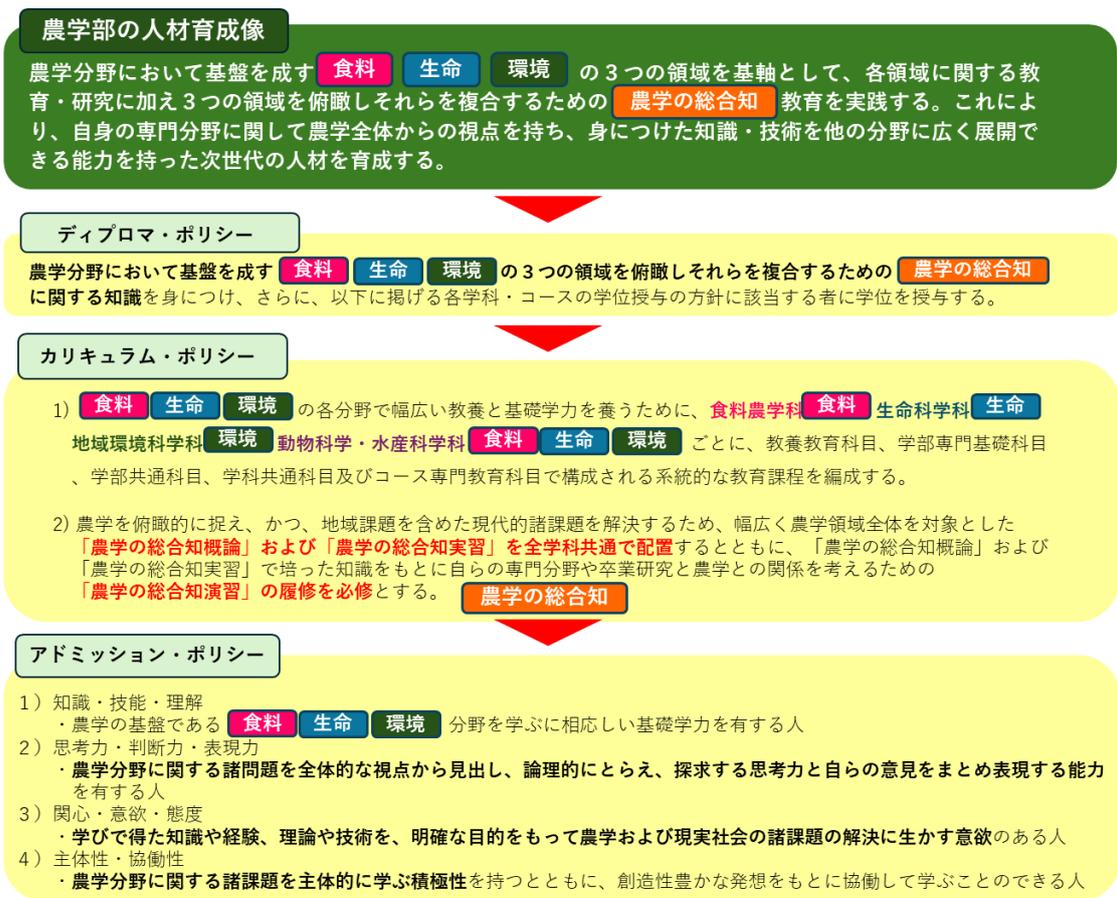


図1. 人材育成像と3つのポリシーの相関図

2. 学部・学科等の特色

新しい農学部における教育は、農学の諸分野に関する専門的な知識や知見を修得し、高度専門技術者として社会で貢献できる人材の養成を基本とするが、特に、個々の専門領域あるいは個別分野を立体的に俯瞰できる能力を有する人材の養成を目的として、下記 1) および 2) を重視した教育を行う。また、農学部における教育においては、特に下記 4)、5) および 6) の3つの特徴を有する。

1) 「食料」「生命」「環境」を基軸とした教育

新しい農学部における教育は、「生命（いのち）を育む食料と環境」と表現できる。これは、高校生や受験生にも理解しやすく、新農学部での学びの広がりも意識できるものである。また、このような大きな教育領域の提示は、学部学生に対し、「なぜ農学部で学ぶのか？」といった修学の意識付けにも繋がる。すなわち、学ぶ科目や実習・実験がどのように「食料」「生命」「環境」に関わっているかという問題意識は、修学者の学習意欲の向上に寄与するものである。さらに、「食料」「生命」「環境」をキーワードとする教育は、「みどりの食料システム戦略」「グリーントランスフォーメーション」「データ駆動型農林水産業」「地球温暖化」といった現代農学が対処すべき諸課題に対応するための新しい農学教育として、幅広い職種に就職する学生には必要不可欠なものであり、また、就職先の受け入れ企業や社会にとってもこれらを備えた人材は即戦力としての活躍が期待できるものである。新しい農学部において、「食料」「生命」「環境」をキーワードに4つの学科に再編する理由もここにある。

2) 「農学の総合知」を掲げた教育

農学は、自然科学のみならず、社会科学も包含する総合科学であり、元々、社会との連結が強く意識された学問体系を有している。新しい農学部においては、上記のように農学を俯瞰的に捉え、かつ、地域課題を含めた現代的諸課題を解決するための文理複眼的な要素を「農学の総合知」として再定義し、入学時から卒業まで、新しいカリキュラムに沿った教育を行う。これは本学農学部で学ぶ学生は、個別の専門領域を修得できるだけでなく、自らの専門領域をより広い視点から社会に役立てる能力を獲得できることを意味しており、高校生や受験生、あるいは、社会に対して、本学農学部で学ぶメリットとして大いにアピールすることができるものである。創立以来1世紀以上に渡って近代農学を教育してきた本学農学部においては、歴史に裏付けられたフィールドや実践を礎とした俯瞰的視野を持つ人材を教育するためのリソースが存在し、入学した学生は岩手の地でしか学べない経験を積むことができる大きなメリットがある。

3) 生命系教育の充実

新しい農学部においては、現理工学部化学・生命理工学科生命コースの教員9名が加わり、岩手大学における生命科学リソースの集約と教育研究の強化が実現する。特に、「生命科学科」には、生命医科学関連の研究で実績のある現理工学部化学・生命理工学科生命コース教員が参画し、「分子生命医科学コース」の教育にあたる。そもそも我が国においては、「医食同源」という言葉もあるように、古くから「食」と「医」の繋がりを重んじてきた。さらに、日本人により青カビから発見されたコレステロール合成阻害薬メバスタチンに代表されるように、現在の農学領域においては、その応用において医科学的な要素が年々強くなっている。しかしながら、これまでの本学の農学教育においては生命医科学的な視点が必ずしも十分とは言えなかった。本教育コースにおける農学と生命医科学の統合による新しい教育は、生物資源の利用から生命医科学への応用を目指した教育研究の高度化に繋がると共に、従来の農学部にはなかった領域として、生命医科学に対する興味を持つ高校生や受験生に対するより幅広い選択肢を提供することが可能となり、これまで岩手大学農学部を志望しなかった層に対するアピール、引いては受験倍率の増加にも繋がる。また、現理工学部化学・生命理工学科生命コースの大学院進学率は7割を超えており、大学院修了後の進路もバイオ系の企業に就職する学生が多い。「分子生命医科学コース」の新設は、新しい農学部における大学院進学率の向上や、社会のニーズに対応した生命系高度専門技術者の養成強化にも繋がるものである。

4) 動物科学・水産科学教育の充実

岩手大学農学部における「水産システム学」および「動物科学」に関する教育は、東日本大震災からの復興や、日本有数の水産・畜産基地にある本学が地域に対する貢献として重点的に取り組んでいる領域であり、地域社会からのニーズも高い。現在の農学部における「動物科学」と「水産システム学」の教育は、別々の学科において行われているが、本来両者は、農学分野における動物性タンパク質の安定供給という共通のミッションを有し、それらの生産と管理、養殖・増殖技術、海洋・陸上の生態系の保全、さらには、生物資源の持続的な利用、等において、「食料」「生命」「環境」を包括する共通性を有する領域である。新しい農学部においては、「動物科学・水産科学科」として一つの学科を構成し、専門性の深化と共に両者を有機的に結びつけた教育を展開する。本学科で学ぶ学生は、「動物科学コース」あるいは「水産システム学コース」のいずれに所属しても、岩手の陸と海の両方を視野に入れたより実践的な教育を受けることができるという大きなメリットを享受できる。

5) 食品健康科学教育の充実

これまでも本学農学部に入学者はその進路として「食品産業」を考える学生が多い。また、岩手県は、食料資源の生産基地として、食品製造や品質管理、および、食品の高機能

化に関わる人材が必要とされている。食品産業に就職する学生は大学院を修了した学生が多く、学部で食品衛生管理者・監視員の資格を取得した上で、大学院修士課程に進み修得した高度な専門性を就職に直結させることができるような教育の充実が必要である。現在、食品健康科学は、応用生物化学科の一領域として教育が行われているが、卒論配属における食品健康科学分野は配属希望者が多いなど、現在の体制は学生のニーズに十分対応できているとは言い難い状況にある。今回の改組では、食品健康科学コースを新しく立ち上げ、学生や社会からのニーズに対応するとともに、当該領域の地域貢献力の強化を目指す。なお、食品健康科学コースは「食料農学科」に属することから、当該コースで学ぶ学生は作物の生産に関わるプロセスを学び、それを基盤として食品あるいは健康科学を実践的に考えることができる能力を獲得することができる。また、上述した、動物科学科や食料生産環境学科水産システム学コースの学生の主要な就職先の一つに食品分野があるが、両学科の学生に対し食品に関する系統的な教育が十分に行われてきたとは言い難い。食品健康科学コースが食料農学科のみならず、動物科学・水産科学科と相互的な教育を展開するという意味においても今回の改組の意義は大きい。先述のとおり、本学農学部は我が国におけるビタミン研究が最初に始まったところでもある。往時の歴史を踏まえた食品健康科学コースの立ち上げは、農学部で学ぶ学生の学びのモチベーション向上に繋がることはもちろん、地域社会への貢献や、次世代の研究領域を切り拓く高度技術者や研究者の養成にも寄与するものである。

なお、各学科およびコースにおける教育の特色は下記した通りである。

① 食料農学科

人類の生存基盤である食料の生産とそれを基にした食品に関わる知識と技術の教育と研究を行い、地域・国際社会での食料生産、食品供給、健康分野における課題解決や新しい価値の創出を通じて、健康で持続的な食料と食品の生産・供給に関する教育を行う。

①-1 農学コース

持続的な食料生産のため農業および食品産業の問題解決に貢献できる人材の育成を目的に、農作物の栽培技術の高度化とその生産基盤となる土壌の保全、植物の生産性・機能性の向上、品種開発、植物ウイルスを利用した先端技術の開発、食料安全保障を支える政策・戦略などに関わる教育を行う。

①-2 食品健康科学コース

国内外の食品産業の発展や超高齢社会において食を通じた人の健康に寄与できる科学的な知識と広い視野を備えた人材の育成を目的に、食材や食品、その成分の物理的・化学的特性、高度な食品加工に関する知識や技術、食品、栄養および天然資源の健康機能性などに関する教育を行う。

② 生命科学科

地球環境問題の解決、種の多様性の次世代への保存、健康寿命の延長など、次世代の諸問題の解決を先導できる人材の育成を目的とし、生命科学、すなわち植物学・動物学・微生物学・健康科学など様々な学問の基礎的かつ共通部分における分子レベルでの知識と理解をベースに、様々な問題を解決し教育に展開する。

②-1 分子生物機能学コース

微生物、植物、昆虫、動物など様々な生き物の細胞や個体レベルで見られる多種多様な生物機能に関する分子レベルの解明を教育に還元する。

②-2 分子生命医科学コース

微生物から動物、ヒトに至るまでの生命現象を分子レベルで解明し、その知見を健康衛生、疾病の予防、再生医療技術などに生かし、人々の生活の質向上に寄与できる人材を育成する。

③ 地域環境科学科

持続可能な食と農の科学、地域生態系の保全、森林資源の管理と持続的な利用、持続的農業生産と環境管理、農業インフラの整備、スマート農業システムの導入、グリーントランスフォーメーションについて、地球環境問題と SDGs 達成を念頭に置いた教育を行う。

③-1 革新農業コース

グローバルな視点と高度な専門知識を備えて地域農業を先導するとともに、持続可能な食料・農業・農村システムの実現に向けた取り組みを通じて SDGs 達成に貢献できる人材の育成を目的とし、農業と食を切り拓く革新的な農業技術について総合的な教育を行う。

③-2 森林科学コース

自然との共生関係を築きながら発展できる地域社会の実現に貢献する人材の育成を目的とし、東北地域の恵まれた自然環境を背景として、森林の持つ多様な環境保全機能や樹木資源の生産と利用、自然生態系の保全・管理、防災を含めた幅広い分野について総合的に教育する。

④ 動物科学・水産科学コース

動物・水産資源の安定的な生産と供給、その高度利用に貢献する人材の育成を目的とし、畜産物および水産物の生産と供給を担う 2 つの産業基盤を背景とした教育を行うとともに、野生動物や海洋生物の生理・生態とそれらの有益な利用方法に関する知識および技術の教育を行う。

④-1 動物科学コース

人と動物が共生する豊かな地域社会の創造に資する人材の育成を目的とし、産業動物生産（畜産）と野生動物の保護・管理に関する知識および技術に関する教育・研究を基盤とし、産業動物を中心に様々な動物種における生理機能の解明、遺伝的改良と増殖、飼料生産と栄養・飼養、および動物資源の有効利用など動物科学に関する総合的な教育を行う。

④-2 水産システム学コース

三陸沿岸域の水産業の復興、わが国の水産業成長産業化に寄与できる人材の育成を目的とし、水産業に関わる基礎的な知識や技術に関する教育・研究を基盤として、水産資源の生産（漁獲、増養殖）から、加工、流通にいたる一連のシステムを体系的に教育する。

3. 学部・学科等の名称及び学位の名称

(1) 学部の名称

農学部 (Faculty of Agriculture)

本学部は、学部の前身である盛岡高等農林学校が 1902 年に設立されて以来、「実学をもって地域社会に貢献する」という姿勢を堅持し、1 世紀以上を経た現在においてもその精神は脈々と受け継がれている。社会が大きな変貌を遂げようとする現代にあっても設立当初の

理念に基づく実践あるいは実学を重視した農学教育および研究を進めていく姿勢にいったい変わりはない。よって学部名称は、これまで通り「農学部」とする。

(2) 学科およびコースの名称

各学科およびコースの名称は下記の通りとする。

① 食料農学科 (Department of Food and Agricultural Sciences)

本学科は、人々の生存の基盤である食料の生産とそれを基にした食品に関わる知識と技術の教育と研究を行い、地域・国際社会での食料生産、食品供給、健康分野における課題解決や新しい価値の創出を通じて、健康で持続的な食料と食品の生産・供給を担う人材を育成することから学科名称を「食料農学科 (Department of Food and Agricultural Sciences)」とする。

①-1 農学コース (Course of Agricultural Science)

本コースでは、農作物の栽培技術など農学に関する専門職業人、研究者・技術者を育成することからコース名称を「農学コース (Course of Agricultural Science)」とする。

①-2 食品健康科学コース (Course of Food and Health Science)

本コースでは、食品・健康産業に寄与できる科学的な知識と広い視野を備えた人材の育成を行うことからコース名称を「食品健康科学コース (Course of Food and Health Science)」とする。

② 生命科学科 (Department of Life Sciences)

本学科は生物の分子レベルでの知識と理解に立脚し、様々な問題を俯瞰的に捉え、地球環境問題の解決、種の多様性の次世代への保存、健康寿命の延長など、次世代の諸問題の解決を先導できる人材を育成することから学科名称を「生命科学科 (Department of Life Sciences)」とする。

②-1 分子生物機能学コース (Course of Molecular Biology and Biochemistry)

本コースでは、多種多様な生物機能について分子レベルで解明し、その知見を産業への応用をはじめとして、環境や食料、健康などの問題に直面している社会に安定をもたらす研究へと展開し、バイオテクノロジーのフロンティアを築く人材を育成することからコース名称を「分子生物機能学コース (Course of Molecular Biology and Biochemistry)」とする。

②-2 分子生命医科学コース (Course of Molecular Biomedical Sciences)

本コースでは、生物多様性の重要性、感染症や疾患、老化現象の成り立ちを分子レベルで理解できる人材育成、教育プログラムを実施することからコース名称を「分子生命医科学コース (Course of Molecular Biomedical Sciences)」とする。

③ 地域環境科学科 (Department of Rural Environmental Sciences)

本学科では、持続可能な食と農の科学、地域生態系の保全、森林資源の管理と持続的な利用、持続的農業生産と環境管理、農業インフラの整備、スマート農業システムの導入、グリーントランスフォーメーションについて、地球環境問題とSDGsへの対応を念頭に置いた教育を行い、未来の農林業を担う地域先導型人材を育成することから学科名称を「地域環境科学科 (Department of Rural Environmental Sciences)」とする。

③-1 革新農業コース (Course of Innovative Agriculture)

本コースは、スマート農業技術を核とした、農村環境や農業の基盤インフラ整備の技術の開発、地域のネットワークづくり、次世代型食料システムの創出を担うことのできる人材、さらには、グローバルな視点と高度な専門知識を備えて地域農業を先導するとともに、持続可能な食料・農業・農村システムの実現に向けた取り組みを通じてSDGs 達成に貢献できる人材の育成を行うことからコース名称を「革新農業コース (Course of Innovative Agriculture)」とする。

③-2 森林科学コース (Course of Forest Science)

本コースでは、森林を主とする地域生態系の保全と管理並びに森林資源の持続的な生産と利用等に関わる森林及び森林関連分野における高度な専門職業人および森林科学技術者の育成を行うことからコース名称を「森林科学コース (Course of Forest Science)」とする。

④ 動物科学・水産科学科 (Department of Animal Science and Fisheries Science)

本学科は、畜産物および水産物の生産と供給を担う二つの産業基盤を背景とした教育・研究を行うとともに、野生動物や海洋生物の生理・生態とそれらの有益な利用方法に関する知識および技術の教育・研究を行うことにより、動物・水産資源の安定的な生産と供給、その高度利用に貢献する人材を育成することから学科名称を「動物科学・水産科学科 (Department of Animal Science and Fisheries Science)」とする。

④-1 動物科学コース (Course of Animal Science)

本コースでは、動物関連産業の発展と生命科学に関する高度な科学技術の開発に貢献する専門職業人材を含め、人と動物が共生する豊かな地域社会の創造に資する人材を育成することからコース名称を「動物科学コース (Course of Animal Science)」とする。

④-2 水産システム学コース (Course of Fishery Systems Science)

本コースでは、水産業に関わる基礎的な知識や技術に関する教育・研究を基盤とし、水産資源の生産（漁獲、増養殖）から、加工、流通にいたる一連のシステムのいずれかの分野に専門性を置きながら、分野横断的な幅広い知識や技術の習得を通してわが国の水産業成長産業化に寄与できる専門職業人材を育成することからコース名称を「水産システム学コース (Course of Fishery Systems Science)」とする。

(3) 学位の名称

学士（農学）： Bachelor of Agriculture

本学部は、総合的かつ実践的な農学教育および研究を学部の理念とし、その理念のもとに各学科およびコースにおいてそれぞれの専門教育を行うことから、授与する学位は「学士（農学）： Bachelor of Agriculture」とする。

4. 教育課程の編成の考え方及び特色

教育課程の編成にあたっては、カリキュラムマップ（別紙資料2）を作成し、教養教育科目と専門教育科目、さらに専門教育科目を構成する専門基礎科目、学部共通科目および学科共通科目を明示している。また、カリキュラムマップは、各コースの専門教育科目において必修科目である専門コア科目および選択科目である専門サブ科目に分けて記載し、他コース開講科目の識別が容易になっている。なお、カリキュラムマップは科目区分ごとに必修と選択、履修順序が明確になっている。

(1) 教養教育科目の区分と考え方

大学生として身につけるべき幅広い教養と社会性、農学を学ぶ上で基盤となる知識や語学能力、多様な人々や社会と関係を持つ上で必要なコミュニケーション能力や健康的な生活を送るための知識などを培うことを目的として、全学体制による教養教育を実施する。

教養教育は以下の科目区分で構成する。

- ① 技法知科目（外国語科目、健康・スポーツ科目、情報科目）
- ② 学問知科目（人文社会科学・教育学領域科目、理学・工学領域科目、農学領域科目）
- ③ 探究知科目・実践知科目（環境科目、地域関連科目）

（２）専門教育科目の区分と考え方

専門教育科目は、専門基礎科目、学部共通科目、学科共通科目、コース科目によって構成されている。

① 専門基礎科目

専門基礎科目は、農学を学ぶ上で基礎となる知識を修得するための科目群であり、「生物学入門」、「化学入門」、「物理学入門」、「基礎数学入門」、「基礎生物学実験」、「基礎化学実験」、「地学入門」、「線形代数学入門」、「微分積分学入門」、「生物統計学」、「生物学」、「化学」で構成される。「基礎数学入門」は令和7年度から農学部において必修となる「数理・DS・AI教育（応用基礎レベル）」の必修科目に指定されている。

② 学部共通科目

学部共通科目は、今回の改組で重要項目に位置付けている「農学の総合知」教育の関連科目である「農学の総合知概論」、「農学の総合知実習」が必修科目として配置されている。また、数理・DS・AI教育（応用基礎レベル）の必修科目に指定されている「データ分析演習」および「統計的機械学習実践」が含まれる。なお、農学部における専門教育および農学の総合知教育の集大成的な意義をもつ卒業研究がこれにあたる。そのほかに、「海外特別実習」および「インターンシップ」を選択科目として配置している。

③ 学科共通科目

学科共通科目である学科概論は、異なる2つのコースで構成される各学科において、学科所属教員および関連の深い附属施設教員によって、それぞれのコースの専門分野に関連する産業的背景や現状、解決すべき課題を解説し、それら課題解決に向けた研究や所属教員が実施している研究内容を幅広く学習するために設置する科目であり、学生に対して自らともう一方のコースの専門分野を学ぶ意義、両分野共通の課題等を理解するための科目となっている。また、「農学の総合知」教育の観点から、異なる学科の学科概論を履修できるよう配慮している。

④ コース科目

コース科目は、必修科目から構成される専門コア科目と選択科目から構成される専門サブ科目から成る。専門コア科目は、「1.-(3)ディプロマ・ポリシー」および「1.-(4)カリキュラム・ポリシー」の項に記載した様に、当該コースにおいて必ず修得すべき科目群である。一方、専門サブ科目は、それら専門コア科目と関連を持ち、学びの興味や進路に合わせて個々の学生が選択することで、より幅広くかつ深い専門性を確立するための科目群となっている。また、専門サブ科目は「農学の総合知」教育において大変重要な位置づけとなっており、自身の専門分野が農学領域、さらには農学に関連する産業のなかでの意義や役割を理解し、それら相互の関係から高学年時での科目や「農学の総合知演習」、さらには「卒業研究」の円滑かつ充実した履修を可能とする。

なお、各コースにおいて、コース科目とした設置した科目やその詳細は、別記様式第2号（その2の1）および（その3の1）に記載している。

(3) 履修順序の考え方

教養教育科目に関しては、これまで通り、その主要な科目は1年次前期および後期で履修する。実践知科目の地域関連科目においては、学生の専門教育が進行する2年次以降の高年次での履修とし、専門教育と教養教育の連動を図っている。

一方、学部共通科目である「農学の総合知」教育に関しては、各関連科目の開講時期および開講方法がその学習効率において大変重要と考え、低年次における「導入」、低年次から高年次を通じた「知識形成」、高年次における「発展・応用」の3段階で設定している。

まず、「導入」教育であるが、「農学の総合知」教育において、導入部を成す教育であり、なぜ農学を俯瞰的に捉える必要があるのか、自身の専門分野と農学の関係、他の学問領域との関係などを理解することを目的としており、1年次前期および後期で開講する。

次に、「知識形成」教育では、同時期に実施する専門コア科目による自身の専門分野教育とは別に、学生個人が自らの「興味」と向き合い、専門分野にとらわれない幅広い科目群を選択として学ぶステージであり、他学科概論、専門サブ科目群およびそれら以外で学生が自由に履修する科目群から構成され、主に2年次前期から3年次後期に開講する。

最後に、「発展・応用」教育として「農学の総合知演習」および「卒業研究」を実施し、「導入」および「知識形成」パートで醸成された「農学の総合知」に関する知見を基に、3年次後期で配属された各研究室での「研究活動」が農学分野におけるどのような課題を解決することにつながるかを、各研究室の指導教員およびコース所属教員、各研究室所属の学生(大学院生含む)とのディスカッションを通して知り、自身の卒業研究に生かすステージとして3年次後期から4年次後期にかけての開講となる。すなわち、「卒業研究」の農学分野での座標を知り、研究の意義を明確にした上で「卒業研究」に取り組むことを目的とし、「農学の総合知」教育の集大成として位置づけられる。

コース科目においては、1年次において各コースの総論によって大学での学びのスタイルを修得するとともに、レポートを作成する際の文献引用法など大学における導入教育を実施する。また、各コースで学ぶ専門科目や各研究室で行われている研究が、どのように農業や地域と結びついているのかを理解するとともに、コースの全教員および関連する附属施設教員が行っている研究の概要について理解する。また、専門コア科目および専門サブ科目は1年次前期から順次開講するが、それら科目は教養教育や「農学の総合知」教育の導入教育との関係から、2年次前期からの開講科目となっている科目が多い。また、農学部では、全てのコースにおいて、学生の研究室配属を3年次後期からとしており、卒業研究はそれに合わせて3年次後期から4年次後期まで1年半にわたる科目として位置付けている。

5. 教育方法、履修指導方法及び卒業要件

(1) 授業の方法

本学では、共同獣医学科を除き、100分の授業を14週実施することで2単位の授業としている。また、各実習および演習においては、設定単位数から換算された時間数の実習および演習を実施している。なお、各講義、実習および演習には必要に応じて大学院生等のティーチングアシスタントを配置し、担当教員の補助等を行なっている。

(2) 履修指導方法

履修指導は全てのコースにおいて学年ごとにクラス担任を配置し、履修方法や履修時期などについてきめ細やかな指導ができる体制を構築する。また、主に教養教育科目などの履修においては、事務部局である学務課の学生担当がその指導や相談にあっている。

(3) 卒業要件

教養教育科目の必修単位は、技法知科目11単位、学問知科目6単位、探求知科目・実践知科目4単位の計21単位とし、さらに7単位をそれぞれの科目群から選択で履修する。す

なわち、教養教育科目の修得単位数は、計 28 単位とする。

専門教育科目の修得単位数は 98 単位とし、卒業に要する単位数は教養教育科目と合わせて 126 単位とする。

各コースの専門教育科目における必修および選択の単位数は表 1 の通りである。

表 1. 卒業要件単位数一覧表（専門教育科目）

学科	コース	必修科目				選択科目			計
		専門基礎科目	学部共通科目	学科共通科目	専門コア科目	専門基礎科目	学部共通科目	専門サブ科目	
食料農学科	農学	2	16	2	38	7	合わせて 33		98
	食品健康科学	2	16	2	46	7	合わせて 25		98
生命科学科	分子生物機能学	2	16	2	43	7	合わせて 28		98
	分子生命医科学	2	16	2	54	7	合わせて 17		98
地域環境科学科	革新農業	2	14	2	49	5	合わせて 26		98
	森林科学	4	15	2	43	3	2	29	98
動物科学・水産科学科	動物科学	2	16	2	45	5	合わせて 28		98
	水産システム学	2	16	2	28	5	合わせて 45		98

なお、各学科・コースにおけるカリキュラムマップを別紙資料 2 に、履修モデルを別紙資料 3 にそれぞれ示す。

※CAP 制（履修登録 24 単位を上限）の考え方

1 週間（月～金曜日）毎日 6 コマ、1 コマ 100 分、1 学期 14 週に基づき計算すると、大学における 1 学期の授業内学修時間は 6 コマ×5 日×100 分×14 週=42,000 分となる。

さらに、月～金曜日に 1 日あたり 180 分、土・日曜日に計 780 分を自宅等での予習・復習に充てた場合、授業外学修時間は ((180 分×5 日)+780 分)×14 週=23,520 分となる。1 単位の講義科目が 2,700 分（45 時間）であることから、1 学期の上限単位数は 65,520 分÷2,700 分=24 単位となる。

以上により、1 学期に履修できる上限単位数を原則として 24 単位に設定する。

ただし、集中講義の科目などは上限単位数に含めない。また、成績優秀者等については 28 単位まで申請することを認める。

6. 編入学定員を設定する場合の具体的計画

農学部は編入学生の定員を 5 名とし、専門コースを指定した上で学部 3 年次への編入を行う。修業年限は原則として 2 年である。編入学の対象は、高等専門学校や短期大学出身者を含む大学既卒者や 4 年制大学在学者、農業者大学校など専修学校の専門課程修了生等まで門戸を広げ、多様な進路選択の可能性を提供する。

各学科・コースにおける編入学生のモデルカリキュラムを別紙資料 4 に示す。

(1) 既修得単位の認定方法

編入学生が本学に入学する前に大学・高専等において履修した授業科目について、専門教育科目として単位認定できるものとし、科目単位での認定を基本として、農学部教務委員会及び農学部運営会議で審議し、認定する。

(2) 履修指導方法

編入学生は認定科目が各自で異なるため、入学時に教務委員会による個別の履修指導を行う。入学後は3年次担任教員による個別の履修指導も同時に実施する。

7. 企業実習（インターンシップを含む）や海外語学研修等の学外実習を実施する場合の具体的計画

学部共通科目（選択科目）として「インターンシップ」を実施する。長期休業期間での実施を基本とし、希望学生は各学科の担当教員から実習計画についての事前指導を受ける。実習は研修先の指示に従い、実習後には報告書の作成など担当教員からの事後指導を実施し、単位認定を行う。

学部共通科目（選択科目）として「海外特別実習」を実施する。農学部が大学間または部局間の学生交流協定を締結している外国の大学に派遣され、講義、実習及び交流を行う。派遣前には農学部国際交流委員により事前面接及びガイダンスを行い、派遣された大学のカリキュラム等に従い実習を行う。実習後は、報告会を行うとともにレポートを提出し、単位認定を行う。

8. 取得可能な資格

各コースにおける取得可能な資格は表2の通りである。

表2. 取得可能な資格

学科	コース	教員免許： 高等学校教諭 一種免許状	その他の資格
食料農学科	農学	理科、農業	普及指導員（受験資格） 環境衛生監視員（任用資格）
	食品健康科学	理科、農業	食品衛生管理者（任用資格） 食品衛生監視員（任用資格） 環境衛生監視員（任用資格）
生命科学科	分子生物機能学	理科	普及指導員（受験資格） 環境衛生監視員（任用資格）
	分子生命医科学	理科	医薬品登録販売者 危険物取扱者 甲種（受験資格） 普及指導員（受験資格） 環境衛生監視員（任用資格）
地域環境科学科	革新農業	理科、農業	普及指導員（受験資格） 測量士補 ビオトープ管理士（2級）（試験問題の一部免除） 環境再生医（初級） 土木施工管理技士（1級・2級）（受験に必要な実務経験年数の短縮） 造園施工管理技士（1級・2級）（受験に必要な実務経験年数の短縮）
	森林科学	理科、農業	林業普及指導員（受験資格） 技術士補（JABEE修了） 測量士補（申請資格） 造園施工管理技士（1級・2級）（申請資格） ビオトープ管理士（申請資格） 樹木医補（申請資格）

動物科学・ 水産科学科	動物科学	理科、農業	環境再生医（申請資格） 普及指導員（受験資格） 食品衛生管理者（任用資格） 食品衛生監視員（任用資格） 環境衛生監視員（任用資格） 実験動物技術者（受験資格） 家畜人工授精師（申請資格）
	水産システム学	理科、農業	

9. 入学者選抜の概要

(1) 入学者選抜方法

「1. - (5) アドミッション・ポリシー」に基づいて、一般選抜（前期日程および後期日程）、学校推薦型選抜（大学入学共通テストを課さない）、総合型選抜Ⅱ（一部コースを除く）を実施し、多様な素質を有する学生の受け入れを図る。さらに、留学生の要望に応えるため、私費外国人留学生選抜を実施する。

それぞれの選抜に活用する内容および重点評価項目は下記の通りである。

選抜に活用する評価方法とその評価項目

(1) 選抜に活用する内容

入学者選抜方法	該当選抜区分	選抜内容
小論文	学校推薦型 編入学	文章を客観的に読解把握する力、内容に対する自らの考え方を述べる力、農学に関連する基礎学力について評価します。
個人面接	一般（後期） 学校推薦型 総合型Ⅱ 私費外国人留 学生	複数の面接担当者による個人面接を行います。
個人面接 （口頭試問含む）	編入学	複数の面接担当者による個人面接を行います。また、基礎学力を確認するために、口頭試問を行います
出願理由書	学校推薦型 総合型Ⅱ 私費外国人留 学生	出願時に入学を希望する理由を本人が記入し、面接時に評価します。
調査書*	学校推薦型 総合型Ⅱ 編入学	学習の記録を中心に総合的に評価します。
大学入学希望理由 書	一般（前期）	個別試験会場にて入学を希望する理由を本人が記入し、大学で農学を学ぶ意欲について評価します。

(2) 選抜に活用する内容の重点評価項目

入学者選抜方法	該当選抜区分	知識・技能・理 解	思考力・ 判断力・ 表現力	関心・意欲・態 度	主体性・ 協働性
大学入学共通テスト	一般（前期）				
	一般（後期）	○	○		
	総合型Ⅱ				
個別学力検査 <教科>	一般（前期）	○	○		
小論文	学校推薦型	○	○		

編入学					
個人面接	一般（後期） 学校推薦型 総合型Ⅱ 私費外国人留学生		○	○	○
個人面接 （口頭試問含む）	編入学	○	○	○	○
出願理由書	学校推薦型 総合型Ⅱ 私費外国人留学生			○	○
調査書*	学校推薦型 総合型Ⅱ 編入学	○		○	○
日本留学試験	私費外国人留学生	○	○		
大学入学希望理由書	一般（前期）			○	○

*一般選抜（前期日程）、一般選抜（後期日程）においては、調査書は、高大接続及び学力の3要素評価の観点から、総合判定の資料として活用します。

（2）選抜体制

入学者選抜の区分毎の募集人員の目安は表3の通りである。

表3. 選抜区分別募集人員一覧表

学科	コース	入学定員	募集人員					
			一般選抜		学校推薦型選抜	総合型選抜Ⅱ	私費外国人留学生選抜	
			前期日程	後期日程				
食料農学科	農学	50	30	20	3	4	3	若干名
	食品健康科学		20	13	2	3	2	若干名
生命科学科	分子生物機能学	51	25	17	3	3	2	若干名
	分子生命医科学		26	17	5	2	2	若干名
地域環境科学科	革新農業	70	37	21	4	7	5	若干名
	森林科学		33	20	3	7	3	若干名
動物科学・水産科学科	動物科学	55	35	23	3	9		
	水産システム学		20	10	3	5	2	若干名
計		226	226	141	26	40	19	

（3）正規学生以外の受入

1. 科目等履修生

本学では、本学以外の者が本学で開設している授業科目の履修を希望する場合、選考の上で科目等履修生として受け入れている。

2. 特別聴講学生

本学では、協定を締結している海外の大学の者が交換留学生として本学の授業の履修を希望する場合、または本学と連携を結んでいる国内の大学に所属する者が単位互換を目的

として本学の授業の履修を希望する場合、選考の上、特別聴講学生として受け入れている。

3. 研究生

本学では、本学以外の者で本学所属教員の指導のもと、特定の専門分野について研究を願う場合は、選考の上、研究生として受け入れている。なお、研究生の受け入れについては、本学の研究または教育に支障がない場合に限り認めている。

10. 教育研究実施組織等の編制の考え方及び特色

(1) 教員の配置状況について

岩手大学では、全学的観点から中・長期的な教員人事計画を策定し、若手教員や女性教員の割合を含め、人員配置の適正化を図っており、すべての学部の教員人事は全学会議である教員人事会議の審議のもとで決定される。教員人事会議では、また、第4期中期目標期間中における新規採用教員の採用比率目標を、若手教員については40%以上、女性教員については30%以上に定め、在籍比率の適正化を図っている。

新たな農学部発足時における教員の配置予定数は、表4の通りである。

完成年度末にあたる令和10年度末においても前述の教員人事計画により同規模の教員数を維持できる見通しであるため、教育研究体制に支障はない。

なお、主要科目の担当には、原則として基幹教員が充てられている。

表4. 新たな農学部発足時における学科別基幹教員配置予定数

所属学科	教授	准教授	講師	助教	合計
食料農学科	9	6	0	3	18
生命科学科	12	3	1	2	18
地域環境科学科	11	11	1	2	25
動物科学・水産科学科	8	7	0	1	16
学部合計	40	27	2	8	77

※教員公募未実施、候補者未定の採用計画、昇任計画を含む。

(2) 教員の年齢構成

岩手大学では、第4期中期計画において新規採用教員のうち41%以上について、若手教員(39歳以下)を採用することとしており、前述の教員人事計画においても若手教員の採用を強く要請している。そのため、第4期中期目標期間及びその後においても若手教員を積極的に採用することが見込まれるため現在及び将来に向けて、教育研究水準の維持向上及び活性化にふさわしい構成を維持することが可能である。

(3) 研究分野

農学部教員として、所属する学科およびコースに関連する分野・領域、さらには自由な発想に基づく研究を進める体制となっている。各コースにおける研究分野の例は表5の通りであり、学部附属施設である寒冷フィールドサイエンス教育研究センターにおいてもセンター教員がコース教員と連携をとりながら研究を進める体制となっている。

表5. 各学科・コースにおける主な研究分野

学科・施設	コース・分野	研究分野の例
食料農学科	農学	作物学、園芸学、植物育種学、植物病理学、土壌学、植物栄養生理学、農業経済学

	食品健康科学	食品化学、栄養化学、食品工学、食品機能学、天然物生化学、代謝生化学
生命科学科	分子生物機能学	生物化学、細胞生物学、植物生理学、応用昆虫学、共生生物学、応用微生物学
	分子生命医科学	分子生物学、細胞生化学、ケミカルバイオロジー、免疫学、動物行動学、バイオテクノロジー、神経科学、再生医療
地域環境科学科	革新農業	農業水利学、水環境工学、土壌圏循環学、施設機能工学、地域生態管理学、自然共生社会デザイン、フィールドロボティクス、栽培施設学、農業循環工学、農産食品プロセス工学、生鮮食品保存科学
	森林科学	森林造成・管理学、森林工学、森林防災工学、森林政策学、野生動物管理学、保全生態学、木材利用学
動物科学・水産科学科	動物科学	家畜飼養学、動物遺伝育種学、草地学、動物生殖工学、動物栄養機能学、食肉科学、動物行動学、動物生理学、分子生物学・発生学
	水産システム学	水産増養殖学、水産政策・経済学、水産食品加工学、漁業資源生態学、水族遺伝学
附属寒冷フィールドサイエンス教育研究センター	持続型農業生産技術分野	果樹園芸学、野菜園芸学、植物育種学、家畜繁殖学、家畜生産学
	循環型森林管理技術分野	森林造成学、森林管理学、林業経済学、森林環境社会学、山村社会経済論

11. 研究の実施についての考え方、体制、取組

農学部では、農学憲章における研究の目標を基盤としながら、持続可能な地域農林業と豊かな地域社会の形成に貢献し、地球規模の問題を視野に入れた地域的課題を解決し、生物系地場産業の創出・発展への積極的な取り組みを展開し、それらの研究成果の世界への発信増大を目標としている。

研究は、農学部には在籍する常勤教職員、特任研究員及び農学系技術部職員が連携する体制で実施する。農学系技術部は、農学部長が兼任する技術部長の元、後述する本学部附属施設の農場を農学生命・生物グループが、演習林を森林・環境グループがそれぞれ管理し、本学部に係る実習等の円滑な運営を担っている。また、本学は研究支援・産学連携センターを有し、研究推進及び地域連携に係る目標・戦略に基づき、特色ある研究の推進・支援並びに学術研究の基盤強化を図るとともに、教育研究成果及び知的資産の地域への普及・還元を通じ、地域創生に取り組んでおり、本学部設置の地域連携推進室がこれと連携し、科学研究費助成事業の獲得及び産学官連携に係る総合的な研究支援を行っている。釜石キャンパスでは産学官連携専門員を置き、研究支援・産学連携センターと連携しながら水産システム学コース教員の研究支援を行っている。

12. 施設・設備等の整備計画

(1) 校地、運動場の整備計画

本学部の教育・研究を支える上田キャンパスは426,592 m²の敷地を有しており、講義棟である学生センター棟を含め、建物延べ面積は149,804 m²で、全ての学部・研究科が設置されている。

上田キャンパスにおいては、運動場(22,222 m²)、体育館(2,253 m²)を有し、このほか、野球場、球技場、テニスコート、柔剣道場、弓道場、プール等が整備されている。学生が休息するスペースは、福利厚生施設内に談話室、食堂、売店等が備えられており、改組後においても、既に整備されている施設等をこれまでと同様に有効活用していくとともに、可能な限り教育研究にふさわしい整備を図っていく。

上田キャンパスのほかに本学部附属施設として、岩手県滝沢市及び雫石町に寒冷フィールドサイエンス教育研究センターの滝沢農場(敷地面積約44万m²)、滝沢演習林(敷地面積

約 280 万㎡) 及び御明神牧場・演習林 (敷地面積約 1,094 万㎡) を有し、本学部に係る実習の場所を備えている。

(2) 校舎等施設の整備計画

本学部の教室、実験・演習室については、既存の講義室等を活用することで対応可能である。また、学生の自習室等については、これまでも多数の大学院生を受け入れていることから、既存の自習室等を活用することで十分に対応可能である。さらに、建物内には有線、無線の LAN 環境が整備されており、常時インターネットに接続することができる。

本学部における講義室は以下のとおりである。

【農学部北講義棟】

- 1 番講義室 (50 人)
- 2 番講義室 (104 人)
- 情報処理演習室

【農学部南講義棟】

- 3 番講義室 (50 人)
- 4 番講義室 (104 人)
- 5 番講義室 (50 人)
- 6 番講義室 (75 人)

【農学部 5 号館】

- 7 番講義室 (177 名) 遠隔講義システムを設置
- ぼらんホール (216 人)
- 共用スペース C (50 名) 遠隔講義システムを設置

【農学部 6 号館】

- 102 講義室 (40 人)
- 103 講義室 (54 人)

また、専任教員は所用の研究室を有し、学生の研究指導を行うには十分なスペースを確保している。

(3) 図書等の資料及び図書館の整備計画

本学上田キャンパス内の図書館には、自然科学、人文科学、社会科学等の各分野の蔵書を備えている。

また、図書館の蔵書 (約 90 万冊) のほか、電子ブック約 1 万タイトル、電子ジャーナル (約 6 千種: Elsevier、Wiley、Springer、American Chemical Society、American Physical Society、Oxford University Press、Nature、Science など) と Scopus、SciFinder、Japan Knowledge などのデータベースも整備しており、本学の学生・教職員であれば学内外から 24 時間利用することができる。

図書館の総面積は 9,088 ㎡であり、665 席の閲覧座席を整備し、学生利用施設としては、12 名ほど利用可能なグループ閲覧室 2 室と 42 名ほど利用可能なプロジェクタ設置のグループ演習室 1 室、ネット利用可能なパソコンを設置している 45 席のマルチメディア閲覧室と 5 席のインターネットコーナーや無線 LAN の設備もあり、図書とデジタル資料の双方を同時利用可能な学修環境を提供している。

2 階サービスカウンター隣に学修支援室 (ラーニング・サポート・ルーム) を開設し、外国人学術研究員 1 名 (英語学修) と退職教員 8 名 (国語、地理、物理、化学、数学、情報専門) で学期中の平日 14 時から 17 時までの間、英語学修指導やリメディアル教育、学修相談を行っている。このエリアには英語のリーディングとリスニング向上を目的とした多読リーダーを約 1,800 点整備しており、今後も資料整備を行う計画である。これと連動する形で、同フロアに自由配置が可能な机、椅子、ホワイトボード等を設置したグループ用の学修

エリアがあり、今後もグループ学修支援の強化を予定している。

図書館は学期中の平日は9時から21時30分まで、休業期間中の平日は9時から17時まで、土日は通年で10時から18時まで開館しており、ICTを利用した本学や他機関の蔵書検索や情報収集及び自修のための空間を提供して、学生の教育研究活動を支援している。

13. 管理運営

本学部では、農学部教授会（農学部附属の教育研究施設及び岩手大学大学院連合農学研究科の専任教員を含む。）を設置する。教授会は教授、准教授、講師及び助教により組織され、毎月1回定期的に開催し、教育研究に関する重要事項を審議する。具体的には、学生の入学、卒業及び課程の修了に関する事項、学位の授与に関する事項、教育課程の編成に関する事項及び教員の選考に関する事項等である。

また、教授会の運営を円滑に行うため、学部長、副学部長、評議員、各学科長、附属教育研究施設の長及び事務長を構成員とする農学部運営会議を毎月1回定期的に開催し、教授会から付託された事項等について本運営会議において審議、決定する。

14. 自己点検・評価

（1）実施体制及び実施方法等

本学では、学校教育法第109条第1項の規定に基づく自己点検・評価について、「国立大学法人岩手大学自己点検・評価規則」及び「岩手大学内部質保証に関する実施要項」を定め、教育研究評議会の統括のもと定期的に自己点検・評価を実施している。

内部質保証体制の構成組織（以下部局担当委員会）には、各学部・研究科の教育課程の内部質保証を管轄する学部点検評価委員会等をはじめ、教養教育を含む学士課程全般の企画調整を行う岩手大学教務委員会、大学院課程全般の調整を担う大学院委員会を置き、さらに教育研究活動に係る施設及び設備、学生支援並びに学生の受入に関する内部質保証を管轄する全学委員会を定めている。

自己点検・評価の実施にあたっては、上記実施要項に基づく「自己点検・評価のガイドライン」を定めており、部局担当委員会は設定された評価項目・評価基準に則して点検・評価を行い、教育研究評議会が部局担当委員会が実施した点検・評価の結果に基づき、全学的な内部質保証の実施状況の確認及び内部質保証に関する取組の検証を行っている。自己点検・評価の結果、内部質保証に係る改善事項が認められた場合は、教育研究評議会において当該部局委員会に改善の要請を行い、改善に向けた対応状況を確認することとしている。

（2）評価結果の活用・公表

自己点検・評価の結果は、「内部質保証体制における自己点検・評価の実施結果」として総括を作成し、教育研究評議会の審議を経て本学ウェブサイトで公表するとともに、部局担当委員会に評価結果のフィードバックを行い、教育の質保証・改善に向けた検討に活用している。また、教育研究評議会から要請した改善事項については、年度末に当該部局委員会から進捗状況の報告を受け、改善に向けた検討及び施策が行われているか確認・検証を行うことで実効性のある内部質保証の維持・向上に努めている。

15. 情報の公表

（1）大学としての情報提供

岩手大学の公式ホームページにおいて、大学の理念、中期目標、中期計画及び大学が目指す方向性を発信しているとともに、カリキュラム、シラバス、学則等の各規則や入学定員、学生数、教員数等の大学の基本情報を公開している。

その内容は以下のとおりであり、掲載しているホームページのアドレスは、
(<https://www.iwate-u.ac.jp/about/disclosure/education.html>) である。

- ① 大学の教育研究上の目的及び3つのポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）に関すること。
- ② 教育研究上の基本組織に関すること。
- ③ 教員組織及び教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関すること。
- ④ 入学者に関する受入方針及び入学者の数、収容定員及び在学する学生数、卒業又は修了した者の数並びに進学者数及び就職者数その他進学及び就職等の状況に関すること。
- ⑤ 授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関すること。
- ⑥ 学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関すること。
- ⑦ 校地、校舎等の施設及びその他の学生の教育研究環境に関すること。
- ⑧ 授業料、入学料その他の大学が徴収する費用に関すること。
- ⑨ 大学が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関すること。
- ⑩ その他（教育上の目的に応じ学生が修得すべき知識及び能力に関する情報、学則等各種規程、設置認可申請書、設置届出書、設置計画履行状況等報告書、自己点検・評価報告書、認証評価の結果等）

（2）農学部としての情報提供

農学部の公式ホームページにおいて、学部のカリキュラム、入試情報、課程・学科案内、就職情報、授業アンケート結果等の情報を公開している。掲載しているホームページのアドレスは、(<https://www.agr.iwate-u.ac.jp/>) である。

16. 教育内容等の改善のための組織的な研修等

（1）大学としての取り組み

本学において全学の教育をマネジメントし、全学共通教育の企画・実施、組織的な教育改善（FD）、専門教育間の連携、の3つについて企画力や継続性を高め、「教養教育と専門教育との調和」という目標達成のための組織として、平成16年に大学教育センターを設置した。その後、入り口（入試）から出口（卒業、就職・進学）までの一貫したシステムの構築という理念の下、入試、学生支援、キャリア支援の各部門、及び国際交流部門を加えて拡充・総合化し、本学の教育全体を推進する組織として教育推進機構を設置、令和2年10月には自らの理念を踏まえ、その責任において、本学の実情に合致した形で教育体制を再構築するために、教学マネジメントセンターとして新たに設置し、現在に至っている。

教学マネジメントセンターの目的は、部局と連携・協力し、学修者本位の教育を行うための改善に取り組むことであり、教育の実施に係る調整及び改善に関すること、学修成果や教育成果の把握・可視化に関すること、ファカルティ・ディベロップメントに関すること、教学IRに関すること、学修支援に関することを実施している。

（2）農学部としての取り組み

①授業アンケートの実施

本学部教員の授業改善、教育の質向上に資することを目的として、前期授業、後期授業それぞれの終了時に受講生を対象とした「授業アンケート」を実施している。アンケート実施後には、個別集計結果を学内限定のWebにおいて教員に周知している。

②「全学FD研修」との連携

教学マネジメントセンターが主導する全学的なFD研修に参加することで、指導・評価方法、効果的な授業の実施と教育能力の向上に努めている。

③「授業の公開・参観」の実施

各教員が授業方法や教授法等を公開・参観することで、お互いの授業改善の一助となり

得るよう、FD の意識向上に向けて、後期授業期間に「授業の公開・参観」を実施している。

④「卒業時アンケート」の実施

学生を対象に、卒業時にアンケートをとり、教育課程や指導体制等の意見を収集・分析し、教職員間で共有し教育改善に役立てている。

17. 社会的・職業的自立に関する指導等及び体制

(1) 教育課程内での取り組み

① 教養教育での取り組み

本学では岩手大学教務委員会及び岩手大学学生支援委員会で定めたキャリア教育方針の下、教養教育において、教学マネジメントセンターと地域協創教育センターが連携し、キャリアを考える、地域協創入門、企業経営学、デザイン思考入門等、自律的なキャリアのデザインに必要な知識と主体的に進路を選択する能力を養成する科目を開講している。

② 農学部専門科目での取り組み

本学部の専門教育においては各学科・コースにおける専門科目で開講している講義及び実習のなかで、独立行政法人農業研究機構東北農業研究センターや森林総合研究所東北支所など多様な外部研究機関、岩手県をはじめとする地方自治体、さらには家畜改良事業団盛岡種雄牛センターなど民間組織を訪れ、各組織の業務内容や社会的使命を深く学ぶ機会も多い。さらには、「8. 取得可能な資格」の項にも記載したように、指定されている専門科目の修得によって様々な資格の習得が可能であり、学生の職業選択の幅を広げることが可能な体制にある。

(2) 教育課程外での取り組み

全学的な学生のキャリア教育や就職活動・インターンシップ等の支援等のため、学務部学務課に地域協創教育室キャリア教育グループが設置され、以下のような取り組みを行っている。

- ・ 就活・インターンシップガイダンスの開催（複数回）
- ・ キャリアアドバイザーによる個別キャリア相談対応（自己分析、エントリーシート対策、面接模擬練習、内定対応、進路相談、インターンシップ選考対策等）
- ・ 外部講師による就活スキル基礎、ブラッシュアップ、特別講座の開催
- ・ 教員採用セミナーの開催（面接対策、体育実技、音楽実技、英語実技等）
- ・ 個別／合同企業説明会の開催
- ・ インターンシップ・合同企業説明会・企業情報等の提供
- ・ 公務員試験情報等の提供

(3) 適切な体制の整備について

本学部では、教授会の下に、学生支援委員会を設置し、学生の就職指導・支援に関する事項を含む学生生活全般（生活支援、賞罰、学生生活に関し必要な事項）を組織的に取り扱う体制を整備している。